



国際交流
記録文集
International Exchange Record

2022



国際交流

目次

『国際交流記録文集』第14号 発刊に寄せて 奈良学園大学 社会・国際連携センター長 善野 八千子	
『国際交流の再開に向けて』 学長の挨拶 奈良学園大学 学長 金山 憲正	1
奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流	
奈良学園大学と蘇州科技大学文化交流(オンライン)プログラム	2
『第2回奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流(オンライン)を開催して』日本語版・中国語版 人間教育学部 准教授 山田 明広	3
日本におけるSDGsの現状と課題 PPT 人間教育学部 浅倉 聖斗・渡邊 大輔	4
学校教育におけるジェンダー平等実現に向けて PPT 人間教育学部 白木 郁・茶園 芽衣・久田 暖子	5
SDGs海の豊かさを実現するため我々ができること PPT 人間教育学部 寺口 翔馬・平松 義士	6
奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流(オンライン)事後レポート 人間教育学部 浅倉 聖斗・渡邊 大輔・白木 郁・茶園 芽衣・久田 暖子・寺口 翔馬・平松 義士・松田 蒼史	7
カンボジア短期研修	
『カンボジア研修の「変化」と「人々」』 人間教育学部 教授 松井 典夫	9
カンボジア研修レポート 人間教育学部 田中 佐和子	10
笑って過ごせること～カンボジア研修を終えて～ 人間教育学部 永江 二葉	11
新たな発見 人間教育学部 酒井 彩優	12
日常生活と授業の関係性 人間教育学部 寺本 風太	13
カンボジア短期研修を通して得た学び 保健医療学部 高橋 莉佳子	14
自分の足で目で経験することの大切さ 保健医療学部 西脇 薫子	15
カンボジア研修において考えたこと・感じたこと 保健医療学部 三浦 理彩子	16
人と人とのつながり 保健医療学部 鍵政 美凜	17
セブ島語学研修	
『2022年度 Cebu語学研修を終えて』 人間教育学部 教授 森 一弘	18
セブ島語学研修で学んだこと 人間教育学部 石原 義規、津野 一樹、菅 智慎、木津 史晴	19
国際看護演習	
『タイ王国 チェンマイ大学での研修再開によせて』 保健医療学部 教授 堀内 美由紀	20
国際看護演習事後レポート 植田 愛都、香田 斐南、新屋敷 美奈、幡野 歩花、細川 未来、清水 颯	21
国際看護論演習の学び -COVID-19について- 保健医療学部 植田 愛都	22
Health Care System of Thailand 保健医療学部 新屋敷 美奈	23
タイ研修での学び HIV・エイズ 保健医療学部 香田 斐南・幡野 歩花	24
国際看護演習：母子保健 保健医療学部 細川 未来	25
タイ研修 -伝統医療の学び- 保健医療学部 清水 颯	26
編集後記 日本語版・英語版 人間教育学部 オチャンテ・カルロス先生	32

「国際交流記録文集」第14号 発刊に寄せて

この度、「国際交流記録文集」は第14号を迎え、奈良学園大学が登美ヶ丘キャンパスにワンキャンパスとなって初めての発刊という新たなスタートを迎えました。

社会連携センターと国際交流センターの統合により、「ローカルとグローバルの融合」としてのグローバルの役割を担う「社会・国際連携センター」としては、5年目の発刊という節目でもあります。グローバルとローカル、双方の視点を自由に行き交い、グローバルとローカルの自分の課題を見つけ出し、解決に向けて努力するという真の意味で「グローバル」な資質・能力を備えた人物が一層求められてきました。

この間に「国際交流」はコロナ禍収束または共存という様々な言葉で、何よりも安全と学生の育成を第一にしながら、世界の動きを本学の取組に反映させようと努めてきました。

今年度の「国際交流記録文集」第14号発刊にあたって、主に以下の3点に着目頂けたらと存じます。

1点目は、2022年度の社会・国際連携センターの2つの事業です。

まず、特別聴講生の受入が叶わない状況が続いている中、オンライン交流を継続できたことです。海外連携協定校のうち古くからつながりのある蘇州科技大学(中国)とのオンライン交流の2年目です。テーマは、「グローバルSDGs」に取り組むことができ、SDGs目標達成期間の中間点2023年に向けての交流が深められたようでした。

次に、3年ぶりによく再開できた「カンボジア短期研修」です。現地研修の再開にあたっては、周到な事前準備や日々の連絡調整などによって、実現に至りました。参加者が現地交流や直接体験から得られた貴重な価値と新たな発見等を記憶と共に記録に残せる本誌を大切にしたいと思います。

2点目は、両学部においても国際交流の現地研修が再開されたことです。

保健医療学部看護学科「国際看護学演習」ではタイ王国立チェンマイ大学看護学部において、人間教育学部では「セブ島語学研修」の取組と参加者の皆さんの大きな成長がありました。今回は、その成果を寄稿して頂く事ができました。誠にありがとうございました。

3点目は、日本語、英語、中国語等の言語表記を一冊に納めて編纂するとしたことです。これまで、翻訳版を別冊にしてHPにアップするなど一つの工夫と考えてきた年度もありました。しかし、日常生活においてもニュース、標識、案内、アナウンスなどでも、日本語、英語、中国語、韓国語等を同時に視聴する多言語社会に変化しつつあることが実感されます。多文化共生をコミュニケーションツールとしての多言語表記から見直しながらか進めていく契機にもなるうかと思われま

最後にになりましたが、本年度の社会・国際連携センターの活動に御協力頂きました皆様、また継続して、各学生の指導に温かい配慮と支援に誠心誠意あたられた本センター運営委員並びに職員各位に深く感謝致します。

奈良学園大学 社会・国際連携センター長
人間教育学部 特任教授 善野 八千子





国際交流の再開に向けて

奈良学園大学 学長 金山 憲正

昨年の10月以降「国際的な人の往来再開に向けた措置」として入国時の水際対策がかなり緩和されてきました。奈良学園大学が3年前まで実施していました、外国からの留学生受け入れや本学の学生を海外に派遣する等の国際交流をいよいよ再開することができる状況になってきたのではないかと喜んでます。

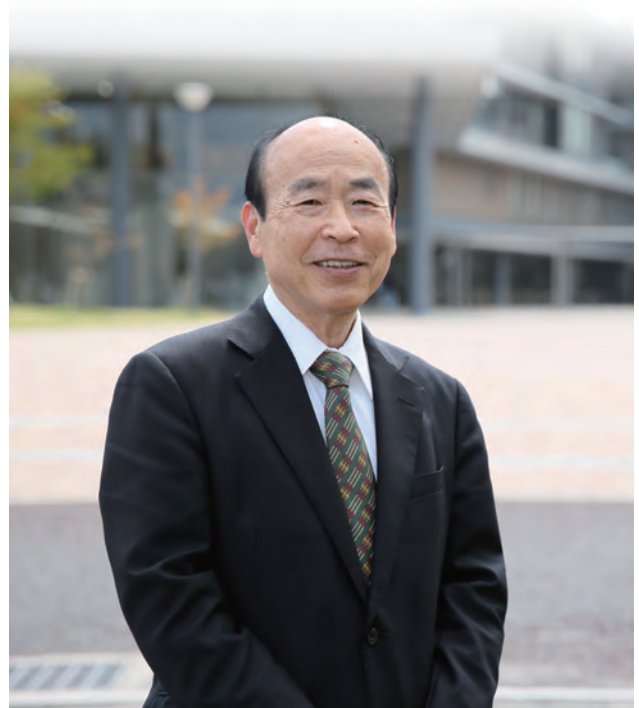
思い起こせば2020年の1月にWHOから出された新型コロナウイルス確認発表に続き、日本では2月に横浜に入港したクルーズ船から多くの感染者が出たことがマスコミでも大きく取り上げられるようになりました。その後感染が急速に拡大し、2月末には全ての小中高等学校で臨時休校措置がとられたり、町では外出規制が行われ東京オリンピックが延期されたりするなど、これまでの生活からは想像も出来なかった制約のある厳しい状態が3年間続きました。中でも2020年は奈良学園大学の国際交流行事関係で最も大きな影響を受けた年でもありました。ちょうど本学のカンボジア研修とセブ島語学研修がそれぞれの現地で実施されている時期とクルーズ船での感染状況から出入国の水際対策が強化され始めた時期とがピッタリ重なってしまったのです。このまま予定通りの日程で研修を進めていては参加している学生や付き添いの教職員が帰ってくることが出来ない恐れがありました。最善の対策を考えるため、社会・国際連携センターが中心となって危機対策本部会議において検討した結果、研修予定を即座に中止し帰国の指示を出す方針が決定され参加者全員が日本に向けて現地を出発いたしました。そのため、当初の研修目的の半分程度しか達成できていない状態で研修を中断したことになり大変悔しい思いをいたしました。しかし、2つの研修の参加者全員が無事帰国した翌日から日本とカンボジアおよびフィリピンを結ぶ航空機の運航中止が発表され、一日違いで帰国できなくなるところでしたので、途中でも思い切って帰国したことは今後の国際交流事業を進めていく上で教訓として活かせる事例となりました。

このように2020年から国際交流が計画通りの完全な形で実施することが出来ず悶々とした3年間を送ってきましたが、昨年末あたりから政府の感染拡大防止対策の基本方針がかなり緩和されていますので、いよいよ本格的な国際交流の再開の時期がそこまで近づいてきている感じがいたします。コロナ感染者の数も今年になり減少傾向を見せており、最近はその傾向が顕著になってきました。その時期を捉え本年度は本文集にも掲載されていますようにカンボ

ジアの短期研修とセブ島への語学研修を実施することが出来ました。

来年度はコロナ前のようにさらに活発な国際交流が実施できるのではないかと期待を抱いています。つい最近、中国からの特別聴講生11名の来日が可能になりそうであるとの情報もあり、順調に国際交流の再開実現に向けての環境が整ってきているように思います。

ただ、コロナ感染拡大が終息の方向に向かっているとは言いまでも、まだまだ気を許す段階ではないと思いますので、実りある国際交流の再開に向けてあらゆる事態を想定し、万全の体制で実施できるよう関係者一同気持ちを引き締めて準備に取りかかりたいと考えています。





令和4年度 奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流(オンライン)

日時 2022年10月25日(火) 16:20~17:50 (中国現地時間15:20~16:50)

奈良学園大学側会場: 3号館3302教室

方式 ZOOMによるオンライン交流

視聴用リンク: <https://kansai-u-ac-jp.zoom.us/j/95346442178?pwd=QTK5eWJBQVZPckpaS0lLMUZUM1ZxQT09>

ミーティングID: 953 4644 2178

パスコード: 184613

テーマ SDGsについて語ろう! (让我们谈谈可持续发展目标!)

◎司会: 山田 明広(奈良学園大学人間教育学部・准教授)

1. 両学よりあいさつ(10分)

善野 八千子 (奈良学園大学社会・国際連携センター長、人間教育学部・特任教授)
 銭 佳 (蘇州科技大学国際合作交流所・所長)

2. 両学学生自己紹介(5分)

3. 発表(45分)

- | | |
|----|---------------------------------|
| 1. | 発表者: 浅倉 聖斗・渡邊 大輔 (奈良学園大学) |
| | テーマ: 「日本におけるSDGsの現状と課題」 |
| 2. | 発表者: 石 蓉 (蘇州科技大学) |
| | テーマ: 「循環型農業におけるSDGs——おさかな畑を中心に」 |
| 3. | 発表者: 沈 芸丝 (蘇州科技大学) |
| | テーマ: 「ゴミ分別と私の故郷」 |
| 4. | 発表者: 白木 郁・茶園 芽衣・久田 暖子 (奈良学園大学) |
| | テーマ: 「学校教育におけるジェンダー平等実現に向けて」 |
| 5. | 発表者: 劉 吉相 (蘇州科技大学) |
| | テーマ: 「徐州における環境保全の取り組み——炭鉱地の修復」 |
| 6. | 発表者: 王 正 (蘇州科技大学) |
| | テーマ: 「故郷の石家庄の持続可能な発展」 |
| 7. | 発表者: 伏 建学 (蘇州科技大学) |
| | テーマ: 「中国におけるエネルギーの持続可能な発展について」 |
| 8. | 発表者: 寺口 翔馬・平松 義士 (奈良学園大学) |
| | テーマ: 「海の豊かさを守るために我々ができること」 |
| 9. | 発表者: 楊 雲驄・徐 昕 (蘇州科技大学) |
| | テーマ: 「環境保護と経済発展の調和がとれた社会へ」 |

4. 質疑応答・フリートーク(20分)

5. 閉会の挨拶・講評(10分)

羅 時光 (蘇州科技大学外国語学部・准教授、日本語学科主任)
 山田 明広 (奈良学園大学人間教育学部・准教授)





第2回奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流(オンライン)を開催して 人間教育部 准教授 山田 明広

本学と蘇州科技大学との間の第2回目となる交流会が、昨年の第1回交流会開催からちょうど1年後の2022年10月25日に開催された。

本学は蘇州科技大学と2010年に連携協定を結び、それ以降、毎年、蘇州科技大学から多くの学生を特別聴講生あるいは夏期短期研修生として受け入れてきた。しかし、コロナ禍のため、2020年度以降、それが実施できなくなってしまっていた。また、本学と蘇州科技大学は連携協定を結んで以降も学生同士の一対一の相互交流はずっと行われてこなかった。そこで、蘇州科技大学からの呼びかけにより、昨年、第1回目の一対一の交流会がオンライン方式により実現した。2回目の今回も新型コロナの状況が一向に好転せず、いずれかの地に赴くことができなかったため、やむを得ずオンライン方式による開催となった。

今回の交流会では、テーマが「SDGsについて語ろう!」と設定されたように、昨年と同様、SDGsに関する発表がメインとなった。ただ、それだけではなく、双方の学生同士でテーマに関わらず自由に語り合ってもらうことでより一層交流を深めてもらうおうと、新たにフリートークの時間を設けた。

交流会は、まず、本学社会・国際連携センター・善野センター長および蘇州科技大学国際合作交流所・銭所長による開会の挨拶により始まり、続いて、両学の会場に参加していた学生が互いに自己紹介し合った後、本交流会のメインの一つである「発表」が行われた。

発表では、本交流会のテーマに従い、SDGsについて、本学学生7名による3つのプレゼンテーションと蘇州科技大学の学生7名による6つのプレゼンテーションが行われた。発表内容は、ゴミ、循環型農業、環境保全、エネルギー、教育とジェンダー、海の資源などと人間と自然との関係に関わるものに偏りがちではあったものの、SDGsというグローバルな目標達成に向けてそれぞれの国ではどのような取り組みがなされているのかがよく分かるものであった。

発表後には、本交流会のもう一つのメインである「質疑応答・フリートーク」が行われた。ここでは、両国の服装や学校におけるジェンダー平等実現に向けての取り組み、食文化などに関して、どちらかと言えば蘇州科技大学の学生が質問し本学学生が答えるという形ではあったものの、活発な意見交換がなされた。

最後に、蘇州科技大学外国語学部准教授で今回の交流会の蘇州科技大学側の取りまとめをして下さった羅時光先生と奈良学園大学側の取りまとめ役であった私が講評を述べることで、本交流会は幕を閉じた。最終的に双方のオーディエンスも含めて約135名の学生と教職員が参加するなど、事前の予想を遙かに超えた活気に満ち溢れたものとなった。

交流会に発表者として参加した学生には、後ほど、レポートを書いてもらった。レポートには、中国の異なる文化に触れることができ良い経験になったとか、中国に対して興味を持つようになったなどといったことが記されており、皆様に今回の参加に対してプラスの意義を見出しているようであった。これらを見るだけでも、本交流会を開催した意義があったように思われる。

昨年10月より新型コロナウイルス感染症に関する水際対策が緩和され、来日外国人はまだかつてほどではないものの徐々に増えてきている。今後、海外の方と直接触れる機会がますます多くなっていくであろう中、本学の学生にはより一層国際交流に目を向け、積極的に異なる文化や価値観に触れる機会を持つことで、少しでも国際的視野を身に付けるよう願わんばかりである。

关于第二届奈良学園大学与苏州科技大学文化交流会(线上)

人間教育学院 副教授 山田 明広

我校与苏州科技大学第二届文化交流会于2022年10月25日举行，距去年举办第一届交流会的时间刚好一年。

我校于2010年与苏州科技大学签订合作交流协议，此后每年接收多名来自苏州科技大学的学生作为特别听讲生或暑假短期研修生。2020年后由于受到新冠疫情的影响，交流项目被迫中止。此外，我校与苏州科技大学签订协议以来，尚未实现限于两校学生之间的相互交流。因此，去年应苏州科技大学的要求，在网上举办了第一次两校学生之间交流活动。由于今年的新型冠状病毒的扩散状况未好转，无法实现现场交流，因此第二届交流活动亦以线上的方式举办。

本次交流会，以“让我们谈谈可持续发展目标!”定为主题，与去年相同，以可持续发展目标相关的发表为重点，另外为了让双方学生不分主题地自由发言以加深交流，还新设了自由交谈的活动时间。

交流会首先以本校社会国际合作中心善野处长及苏州科技大学国际合作交流处钱处长的开场致辞拉开序幕，接下来两个会场的学生们各自进行了自我介绍之后，进入了此次交流会的主要环节之一“发表”。

在发表环节上，沿着本次交流会的主题，分别由我校7名学生3组和苏州科技大学7名学生6组分别进行了发表。发表内容为垃圾处理、循环农业、环保、能源、教育和性别、海洋资源等等，虽然较偏向于人与自然的关系，但能够让我们了解为了实现全球可持续发展目标，各国采取何等举措。

发表环节结束后，我们进行了本次交流会的另一个主要环节“问答和自由交谈”。此环节主要以苏州科技大学的学生提问，我校学生回答的方式进行，关于两国的服装、学校为实现性别平等所进行的举措以及饮食文化等问题积极地交换了意见。

最后由两校的这次交流会负责人苏州科技大学外国语学院罗时光副教授和我进行了点评，以此本次交流活动就圆满闭幕。这次交流会包括双方听众在内有约135名学生和教职员参加，气氛十分活跃，远远超出了我们预期。

这次交流会上，作为代表进行发表的同学们，会后撰写了交流会心得报告。在报告中，他们写道，能够接触到中国不同文化是很好的经历、对中国产生了兴趣等等，这次交流会似乎让大家感受到了文化交流的意义。这些同学们的心得可说充分体现了这次交流会的意义所在。

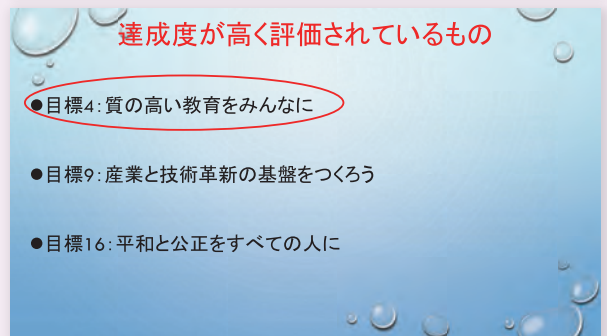
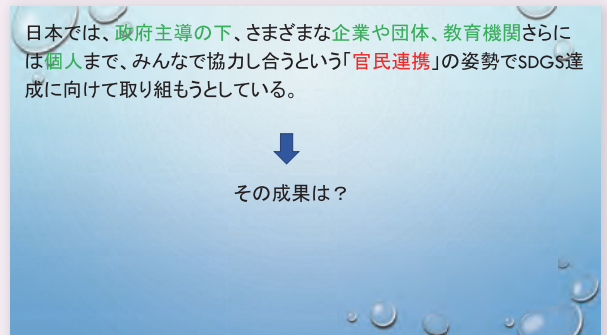
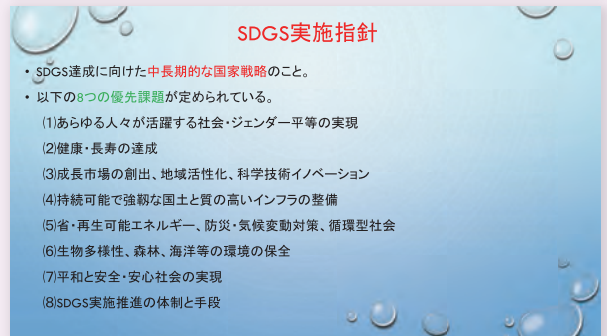
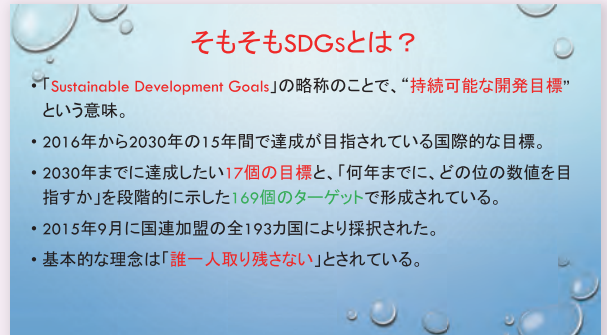
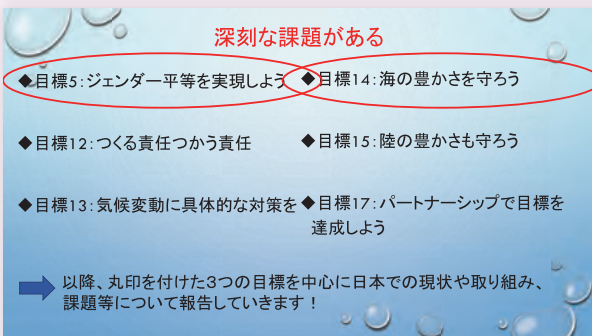
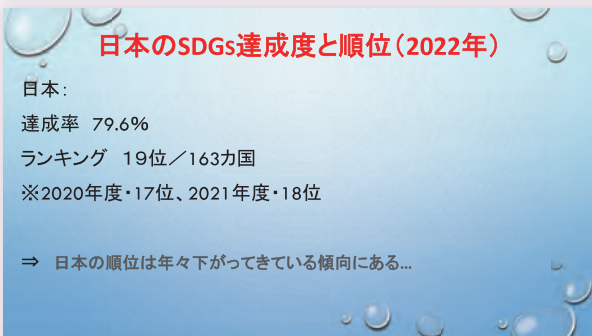
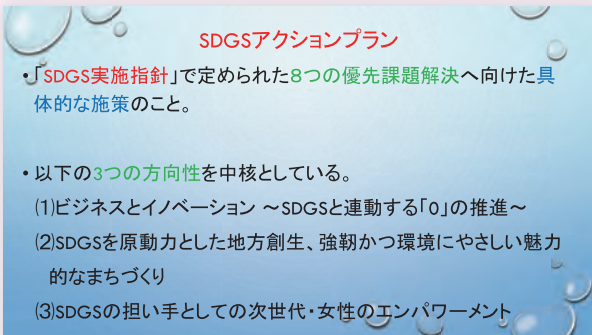
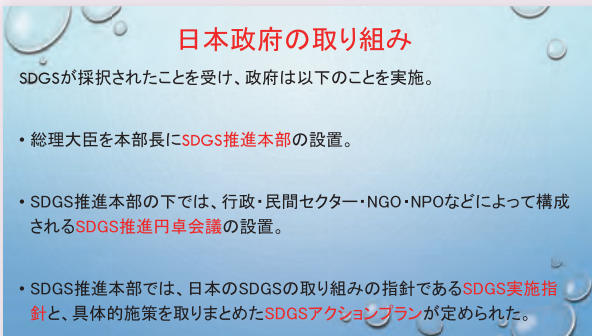
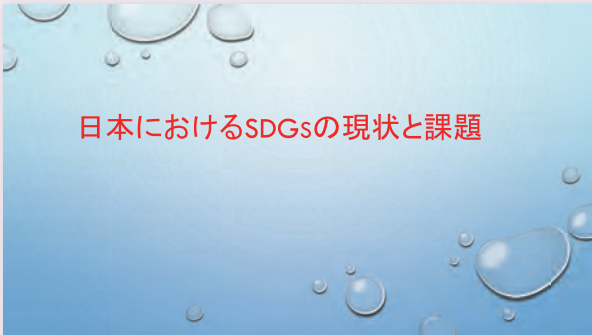
自去年10月以来，由于新型冠状病毒感染相关的边境措施的缓和，访问日本的外国人，虽未如疫情之前，但一直在逐渐增加。以后与外国人直接接触的机会可能会越来越多，希望我校的学生们能够更重视国际交流，珍惜与不同文化和价值观接触的机会，开阔国际视野。



日本におけるSDGsの現状と課題

PPT

人間教育学部 2211301 浅倉 聖斗
人間教育学部 2211316 渡邊 大輔



学校教育における ジェンダー平等実現に向けて PPT

人間教育学部 2211304 白木 郁
人間教育学部 2211306 茶園 芽衣
人間教育学部 2211313 久田 暖子

学校教育におけるジェンダー平等実現に向けて

4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう

正解

日本のジェンダーギャップ指数 146か国中116位
③1位
スコア1,000で146か国中1位
21か国が同率1位

隠れたカリキュラム (隠蔵課程)

教員が意図していないにもかかわらず、社会全体の規範や価値観などが暗黙のうちに児童・生徒・学生に伝達されてしまうという知の伝達プロセスのこと。

「男女別名簿」から「男女混合名簿」へ

問題点:
・児童生徒に男子が優位という意識を抱かせてしまうリスクがある。
・性分化疾患(半陰陽)やトランスジェンダーの児童生徒を無視していることになり、人権問題となりうる。

男女混合名簿 (性別によらない名簿)
男女混合名簿採用学校の割合
1993年度 11.5%
2020年度 87.1%

「男女混合名簿」、「ジェンダーレス制服」

↓

男女平等

+
「LGBTQ」、特に「トランスジェンダー・跨性別者」への配慮

学校教育におけるジェンダー平等実現に向けて

- ジェンダー平等とは男女平等ではなく、男女を含め様々な性のあり方をしている全員が平等になることを理解する。

そのために:

- 社会全体が男女という枠組みを飛び越え、性の多様性について理解し、受け止められるようにすることが必要。
- まずは学校が、そしてその担い手である教職員が性の多様性について理解し、発信していくことが重要。

クイズ(猜謎)

今年2022年のジェンダーギャップ指数(性別差別指数)の日本の総合スコアは0.850で146か国中116位。
では、「教育」の分野だけでは日本は何位でしょうか?

①105位
②53位
③1位

※総合スコア:
政治、経済、教育、健康の各スコアの総合

しかし...

よく見ると、

学校教育においては、ジェンダー平等が実現できていないことがまだまだあちこちに転がっている。

隠れたカリキュラムはどこに見られる?

- 学校で使用される教科書の内容
- 校種や教科・科目によって異なる教員の男女比
- 男女別名簿
- 男女別に規定された制服

など

↓

児童・生徒・学生に知らず知らずのうちにジェンダーバイアス(性別偏見)を植え付けている。

「男女別制服」から「ジェンダーレス制服」へ

問題点:
・女子は冬の寒さ、体調を崩しかねない。
・トランスジェンダーの児童生徒は、性自認と異なる性別の服装を強制され、強い心理的な負担を抱えることになりかねない。

ジェンダーレス制服

制服が定められている高校で女子がスラックスを選択できる高校の割合
2021年度 44.4%

問題点

○ジェンダーレス制服における問題点

- 学校や地域の「伝統」となっている制服の変更には理解を得づらい。
- 自身がトランスジェンダーであると思われることを恐れて、男子がスカートを選んだり女子がスラックスを選んだりしにくい。
- 女子学生がスラックスを選択するケースはまだ見られるが、男子学生がスカートを選択するケースは強制ミッシングアウトになりかねず、ほとんど見られない。
- そもそも制服を廃止し、個性に合わせた自由な服装ができるようにすべきである。

ご清聴ありがとうございました!

感謝聆听!



SDGs海の豊かさを実現するため 我々ができること

PPT

人間教育学部 2211307 寺口 翔馬
人間教育学部 2211314 平松 義士

SDG s
海の豊かさを実現するため
我々ができること


“海の資源を守り、大切に使う”



クイズ

・私たちが普段使っているペットボトルやビニール袋などのプラスチックゴミが年間でどの位、海に流れ出ているでしょう。

- ①100万～400万トン
- ②500万～800万トン
- ③900万～1400万トン



答え ③900万～1400万トン

・現在、世界の海に漂う海洋ゴミは1億5000万トンに達していると言われています。そして、今この瞬間もどんどん増え続けています。さらに、2050年には魚よりもプラスチックゴミの方が多い海になると予想されています。



海洋ゴミの問題点

- 生態系を含めた海洋環境への影響
- 船舶航行への障害
- 観光業、漁業への影響
- 沿岸域居住地域への影響

海洋プラスチックゴミに対する取り組み

日本ではプラスチック製のストローやマドラーの削減
プラスチック製のものではなく紙製の物が多くなっている。
他にもレジ袋の有料化などの取り組みが行われています。




私たちにできること

プラスチックの3R（リデュース・リユース・リサイクル）を進め、プラスチックを有効に、賢く利用する。

- Reduce (リデュース) ゴみになるものを減らす**
 - マイバッグを持参し、レジ袋を減らす
 - マイボトルやマイ箸を持ち歩き、使い捨ての食器や容器を減らす など
- Reuse (リユース) 繰り返し使う**
 - 詰め替え用ボトルなど繰り返し使えるものを選び、ボトルを再利用する など
- Recycle (リサイクル) 原材料として再利用する**
 - プラスチックを分別回収し原料として再利用できるようにする。
 - 再生プラスチックの製品を使う など

まとめ

私たち人間が作り出した人工物は、自然界には存在しないものであり、自然になくなるものではありません。悪いことは、作るのではなく、プラスチックゴミをポイ捨てしたり、不法投棄したりすることなのです。

一人一人が当事者意識を持ち、改善に取り組むことが、海の豊かさを守ることに繋がるのではないのでしょうか。

自分にできるSDG sを見つけて取り組んでいきましょう！！



奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流(オンライン) 事後レポート

2211301 浅倉 聖斗

蘇州科技大学の皆さん、この度は私たちと交流してください、本当にありがとうございました。国際交流をすること自体が、私にとっては初めてのことでしたので、今回の交流会への参加は私にとってとてもいい経験になりました。

私は今回の交流会に参加して、改めてSDGsに対してどう取り組むべきか学ぶことができたように思います。これまでSDGsという言葉について聞いたことはあったものの、具体的にどのようなことなのかは全く理解していませんでした。しかし、この交流会に参加することを機に、SDGsについていろいろ調べてみると、日本にもとても深刻な問題がたくさんあることを知りました。例えば、日本では貧困問題はこれま

でそれほど目立つものではありませんでしたが、ここ最近では上昇傾向にあるなど深刻になりつつあることを知り、自分や日本の将来をしっかりと考えるいいきっかけになりました。また、SDGsだけではなく、中国の環境やゴミ問題に対する取り組みなど中国のSDGsに関する様々なことを知ることもできました。このように、生まれや文化が違っていても、お互いにコミュニケーションをとり、一つの問題について話し合うことで、少しでも国際貢献ができたのではと感じています。

次の交流会では、SDGsといった社会問題だけではなく、お互いの国の文化や歴史についてももっと発表し議論したいと思いました。

2211316 渡邊 大輔

私は、蘇州科技大学とのオンライン交流のメンバーに選ばれた時、SDGsについては名前しか聞いたことが無く、どんな内容のものなのかはほぼ分からなかった状態でしたので、発表内容はどうしようか非常に不安に思っていました。また、中国の学生と交流するということで、どのように話したらわかりやすくなるだろうかなどいろいろ心配にも思っていました。しかし、山田先生や他のメンバー、そして、蘇州科技大学の皆さんの日本語力にも助けられて、当初思っていたほど不安や心配を感じることなく発表することができたように思います。

今回の交流会を通して、最も印象に残っているのは、蘇州科技大学の皆さんの発表です。まず、彼らの発表は、現在

中国各地で行われているSDGsへの取り組みに関して、非常に具体的かつ詳細な説明がされていて、とても分かりやすく素晴らしいものであったと思います。また、彼らは、オンラインでもきちんと判別できるぐらいにははっきりかつしっかりと日本語により発表したり、さらには事前は何の準備なく我々が質問したことに対して答えたりしていて、その日本語能力にはとても驚かされました。

今回の交流会に参加して、今後、日本の、そして、中国のSDGsについてもっと理解を深め、自分でもできることを実行していくことで、SDGsという世界的な目標達成に一役買いたいと強く感じました。

2211304 白木 郁

今回、国際交流の一つとして蘇州科技大学とのオンライン交流会に参加し、SDGsについて発表したことは、様々なことを学ぶいい機会になったと思う。例えば、SDGsとはそもそも何なのか、日本は今の時点でのどの目標が達成できていてどの目標が未達成のままであるのか、その目標を達成するためにはどのようなことを行う必要があるのか、などといったことについて学び、考えることができた。また、日々の生活で少し意識するだけでも目標達成に一步近づいたりSDGsは一国だけの問題ではなく地球に住む私たち皆に関係する問題であることなども学

べたように思う。これからの世界のために一人一人が協力し合い、未来を守っていく必要があると私は考えている。

SDGsについて学ぶことができたのも良かったが、最も良かったのは、国を越えて世界について考えることができたことだ。今回の交流では、中国と日本とで文化が違うからこそ、違う見方や考え方を学ぶことができたのではないだろうか。今回の交流会に参加し、SDGsについて発表し合ったり質問し合ったりして互いに学び合ったことは、非常に貴重な経験になったと思う。

2211306 茶園 芽衣

私が蘇州科技大学との文化交流で学んだことは、文化の違い、そしてSDGsについてです。

私は、今回、ジェンダー平等についてプレゼンをしました。その際、蘇州科技大学の皆さんは、日本の制服についてとても興味を示し、質問をしてくれもしました。中国の中高生は主にジャージで活動しており、日本のような男女別の制服はないため、男女の制服問題について説明するのはとても難しかったです。また、他の参加者の皆さんが、水質汚染や環境、ゴミの分別、教育、格差などといった問題についてプレゼンしており、それらを聞くことで沢山の知識を得ることができました。

今回の文化交流を通して、私には一つ驚いたことがあります。それは、蘇州科技大学の皆さんがプレゼンや質問も含めて全て日本語で話していたことです。外国語を学び話している姿は、同年代の私たちにとっては、十分に尊敬に値することです。私も授業で中国語を履修していますが、簡単な会話すら儘なりません。だからこそ、異国の言葉をスムーズに話す同年代の方々を見てとても驚きましたし、感銘を受けさえもしました。また、日本にとっても興味を持ち勉強してくれていることに対して嬉しさをも感じました。優しく明るい蘇州科技大学の皆さんと交流することができ、中国について少し興味を持つことができました。





2211313 久田 暖子

奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流に参加して、水質汚染や学校におけるジェンダー平等など様々な方面においてSDGs達成に向けての取り組みが日本でも中国でも進められているということを知りました。日中両国がどれほどSDGsに関する取り組みを行っているのかを学ぶことができたように思います。交流会に参加する前は、中国が行っているSDGsに関する取り組みはおろか、日本が行っているSDGs達成に向けての取り組みについてさえ知らないことが多かったので、今後は日中双方のSDGsに関する取り組みについて積極的に学んでいきたいと思いました。

今回の交流では、蘇州科技大学の皆さんは、私たちが日本語で話しているにも関わらず真剣に聞いてくださったり、母語である中国語ではなく日本語で話をしてくださったりするなど、私たちに合わせた対応をして下さり、とてもうれしく思いました。また、質問の際には、奈良についてたくさん質問して下さるなど、日本にとっても関心を持ってきていたようで、さらにうれしく思いました。

オンラインという形式ではありませんでしたが、「SDGs」という同一のテーマについて双方が調べて互いにプレゼンし合うという時間がとても有意義に感じられ、参加して良かったと思いました。

2211307 寺口 翔馬

私が、今回蘇州科技大学と交流して最も学ぶことができたことはSDGsについてです。

SDGsという言葉自体は耳にしたことはありましたが、それが一体どういうものなのかはほとんど知りませんでした。しかし、自分達が発表するに当たっているりと調べたり、交流会当日に皆さんの発表を聞いたりしていく中で、SDGsとはどういったものなのか学ぶことができました。また、SDGsが掲げる様々な目標のうち、日本には達成できていないことがまだまだ多くあることも知りました。他にも、中

国の伝統的な服装とされるチャイナ服(旗袍)についてなど、中国の文化についても知ることができ、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

今回の蘇州科技大学との交流を通じて、普段からエコバックを常用するなど、SDGs達成や将来の為に自分達ができる事をしっかりとやっていきたいと考えるようになったとともに、もっと積極的に国際交流をして他国の文化など普段あまり触れることのない様々なことを学んでいきたいと思いました。

2211314 平松 義士

今回の交流会では、SDGsという私にとってあまりなじみのないことがテーマであったため、交流会に参加する前は少し不安に感じていました。また、交流の相手は日本人ではなく、日本語を母語としない中国の学生でしたので、余計に不安に感じていました。

しかし、実際に参加してみると、蘇州科技大学の学生の皆さんの発表がかなり作り込まれていて分かりやすく、日本語もかなり上手で他国の人たちと交流していることを忘れるほどであったため、そういった不安は吹き飛びました。また、言葉だけでは通じないこともあろうと思ひ、私たちが発表で使用するパワーポイントにイラストや写真を多用するなど事前にいろいろ工夫をしていましたが、このことが功を奏したのか、蘇州科

技大学の学生の皆さんが私たちの発表に対してたくさん質問をして下さるなどの反響があり、私の当初の不安は完全に吹き飛ばされました。最初は、今回の交流会への参加に躊躇していましたが、勇気を持って一歩踏み出し参加することで、SDGsや中国のこと、中国と日本との違い、そして国際交流の楽しさなどを知ることができ、本当に良かったと思います。

これからの日本はグローバル化の一途をたどっていくことだと思います。そのため、今回のような交流会だけではなく、今後様々な場面で色々な国の人たちと交流する機会があると思います。その時に少しでも意思疎通ができるようにするためにも、今後はもっと真剣に英語や中国語といった外国語を学びたいと思いました。

2111307 松田 蒼史

今回の蘇州科技大学との文化交流では、地球に優しくするための環境への取り組みが印象に残った。去年に引き続いて2回目の参加であったが、去年も森林を正しく用い無駄使いを減らそうとする環境への取り組みが挙げられており、いかに今の状態が地球の寿命を縮めているのかがわかった。また、蘇州科技大学側の発表から中国の河北や徐州のことも知ることができたが、中でも特に町一帯が煙に包まれた画像が提示されたのは衝撃的だった。日本ではあまり起こらないことなので、工場の多さによる影響について改めて知ることができた。この他、今回の発表では、資源ゴミの多さにも目を引かれたが、日本や中国では、それだけではなく、食品ロスについても多くの課題が残されている。今回の交流会を通して、世界では、このように、多くの無駄があるということを知ることができた。

この現代、急速に科学技術が発展して豊かな暮らしができるようになったが、このことは長期的に見て地球の害にならない

か改めて考える必要があるであろう。地球の寿命は永遠ではないので、これからの世代が気持ちよく暮らせるよう、まずは無駄を減らすことから意識していきたい。今、私たちにできることは、使わなくなった紙や電池、ペットボトルなどリサイクルできそうなものを集め、そして、それらを回収してくれる施設を政府が設置することで、効率化を図り無駄を減らすことだと考える。また、食品ロスについては、一人ひとりが残さず食べようという自覚を持つとともに、食べ物を大切にしようとする態度を学校生活を通して養っていく必要があるのではないかなと思う。

昨年と今年の二度に渡りこの蘇州科技大学との文化交流に参加して、中国の我々とは異なる文化や価値観に触れ理解することで、お互いの文化や価値観を尊重し合うことの大切さを学んだ。普段の学校生活ではあまりこのような機会はないだけに、非常に貴重な経験となった。



カンボジア研修の「変化」と「人々」

人間教育学部 教授 松井 典夫

コロナ禍の影響

コロナ禍で中断していたカンボジア研修だったが、2020年2月の研修途中での帰国以来、3年ぶりに実施することができた。今回の研修は3年ぶりということもさることながら、ワンキャンパスになって初めての研修ということもあり、人間教育学部と保健医療学部から、合わせて16名の参加希望者があり、8名(JASSO申請人数)に絞らなければならない(結果9名)という嬉しい悲しい事態となった。その結果、人間教育学部から5名、保健医療学部から4名という豊かなメンバーでの研修となった。

しかし、やはり研修の中で、コロナ禍の大きな影響を改めて実感した。それは、私たちの研修でもっとも重要な基点であるカンボジアメコン大学日本語ビジネス学科の変化だ。今回の研修実施時点で、実質的に当学科に所属する学生は4年生の3名(ケオさん、マリマーさん、プッティエさん)のみだった。思い返せば、2015年の奈良学園大学として第1回目の研修から2020年まで、多くのCMU学生が研修に参加してくれていた。最後まで、名前を覚えることができないままのCMU学生もいた。彼らはいつも、本学との研修を絶好の体験的学習場面と認識し、さまざまな場面で本学学生をサポートし、仲間になり、そして友になっていった。本研修の価値は「人」である。「人」の中に文化が宿るからこそ、「人」との強い関わりが多く学びを生んできた。その「人」という要素に、コロナ禍は影響を与えたのだ。CMUの学生たちは、2020年夏のプノンペンにおけるロックダウンで地方へと戻り、そして多くの学生が帰ってこれなくなった。学費を払うことができず、あるいは奨学金が打ち切られて復学を断念した学生たちがいた。追い打ちをかけるように、カンボジアにおける日本語人気は低迷した。日本の景気と勢いをそのまま表すかのよう、日本の企業は出資を渋り、魅力的ではない給与を設定した。学生の人気、ニーズは中国語、中国系企業へと移り、そしてCMU日本語ビジネス学科の2021年、2022年の入学者はゼロとなった。その結果、戻ってきた学生は今回、研修で共に学んだ3名のみとなり、CMUは日本語ビジネス学科の募集を停止した。したがって今回の研修は、CMU日本語ビジネス学科の学生とともに創り出す最後の研修となった。2015年から本研修に関わってきた私としては、始まる前から痛切な思いを抱いていた研修となった。

「人」とのつながりの価値

それでも、今回の研修で「人が少ない」と感じた学生はいなかっただろう。それは、本研修のために日々集まってくれたサポーターがいたからに他ならない。すべての研修過程に同行し、サポートしてくれた立教大学院生のユウタクんは、大学生の頃からCMUで学び、知った仲だった。12月の渡航時に会った時に、CMUの他学科の学生を集めて日本語を教えていることを知り、2月の研修での支援を依頼した。彼は快諾してくれ、自費でカンボジアに来てくれた。私にとって、かけがえのない仲間だ。彼の呼びかけもあり、連日、CMUの卒業生が日本語ビジネス学科室に顔を出し、私たちの研修を支えてくれた。婚約式を終えたばかりの卒業生スレイモイさんは、3年前の研修で中心にいた学生だった。プノンペン日本人学校の「バスママ」の仕事が終わる14時以降に、必ずCMUに来てくれた。2015年の研修からいつもいてくれたソンプワスさんは、送り出し学校の勤務を終える17時からのみならず、何日か仕事を休んで研修の場に顔を出し、支援して

くれた。トントローーチでの授業体験では、本学学生が彼女にとても助けられた。

そして在学生の3人は、私たちの研修期間中、CMU樋口先生の判断ですべての授業を研修支援に充ててくれた。それは確かに、互いにとっての学びになり、貴重な体験的学習の場面である。しかし、その価値を私たちが口にするべきではない。4年生のうちの1人、ケオさんは研修の中盤あたりで、とても疲れた様子を見せた。私は今回の研修では、パーティーはレストランよりもCMUの敷地で行うことを選択した。みんなで日本風のたこ焼きなどを焼きながら交流することは、とても価値のある場面だと実感していた。しかし、研修中盤に到着した看護学科メンバーのウェルカムパーティーについて、たこ焼きパーティーを予定していたのだが、樋口先生からこのような提案を受けた。

「ケオさんが、私はとても疲れているから、できればレストランでやってほしいと言っています」

私はこの言葉を聞き、強く反省した。外でみんなで作りながら交流しよう、と言いながら、実は買い物に付き添い、野菜を切り、調理をしていたのはいつもケオさんだった。また、ある日ケオさんは私に言った。

「明日、夜テストがあるので勉強しなければいけません。明日は私は家で勉強します。ごめんなさい」

私は、どれだけCMUの学生に負担をかけていたかを知った。

開発途上国との研修のあり方と学生の学び

私たち日本人には「人情」という文化がある。あるいは、「関係性」について独特の慣習的感覚があるだろう。それは日本人の良さでもあり、小さな島国で育まれてきた都合のいい合理性でもある。しかしこれは、グローバルではない。そのことを、改めて学び直し、研修のあり方を見つめ直す必要があるのは、学生ではなく私たち大人だろう。今回の研修は、初めてコーディネーターなしで実施した。本学のオリジナルティーが全面的に押し出された研修を実施することができたが、実はCMUに大きく依存した研修であったことに気付かされた。そして、CMU日本語ビジネス学科は今年度をもって閉鎖されることは事実であり、これまでの研修の形は今回で終わりを告げるようになった。

その中で、今回研修に参加した学生たちは、全員が初めてのカンボジアであり、中には入学前から本研修に参加することを望んでいた学生もいた。学生たちは、誰もがCMUの学生や卒業生、訪問先の人々、そしてカンボジアという国と心を広げて関わり、すばらしい時を過ごした。日本では誰も気づかなかったパーソナリティーが、隠すことなく表出し、その良さに改めて気づいたり、ぶつかり合って話し合った夜もあった。そのすべてが輝いていたことと思う。

最後になるが、CMU日本語ビジネス学科の閉鎖に際して、これまで8年間、私たちと出会い、関わってきた人々、カンボジア、CMUの皆さんに心より感謝を申し上げたい。本研修に参加して社会に出た学生は、その多くが教師として全国で活躍している。ときおり会えば、すぐにカンボジアの話になる。日本に留学しているCMU学生と、今でも関わり合っている卒業生も多い。私自身も、本研修で多くのことを学ばせてもらい、研究の新たな視点、エネルギーを得ることもできた。心より感謝するとともに、これからも新たな形での関係を保ち、発展させていければと思う。



カンボジア研修レポート

人間教育学部 2011206 田中 佐和子

私がカンボジア研修を知ったのは高校三年生の時に参加したオープンキャンパスである。そこからこの研修に参加して自分の知らない世界を知り、言語が伝わらない中でどのように子どもたちが楽しいと思えるような授業を行なっていくのかを考えていきたいと思ったためこの研修に参加した。そして私はこの研修で「伝えることの大変さと楽しさ」と「カンボジアの方々の考え」の2つを学んだ。

1つ目の「伝えることの大変さと楽しさ」では、言語が伝わらない中でどのように話したら伝わるのかを考えることが難しかったが、伝わった時はすごく嬉しく、伝わるこ



とがこんなにも楽しいのだと気付くことができた。私は英語を上手に話すことはできないしクメール語を話すことも理解することもできない。だが、カンボジアの方々は私が伝えようとしていることを頑張って理解しようと

してくれ、最後まで呆れることなく話を聞いてくれた。そこからカンボジアの方々の優しさにも気付くことができた。トントローチ小学校でサッカーの授業をした時、指で1を作って「一列に並んで」という指示を出したが伝わらず、授業が思ったように進まなかった。だが、地面に線を引いて手で「待つ」というジェス



チャーをすることによって一列に並ばせることができた。伝わらないから諦めるのではなく、どうしたら理解してくれるのかを試行錯誤しながら伝えることでいつか自分の気持ちや考えを相手に理解してもらえるのだと感じた。そこから私は言語が伝わるかどうかではなく、伝えたい気持ちがあれば伝えることができるのだと学んだ。教師になった際も、子どもたちが理解できるような授業をするためにはどう伝えたら良いのかなど、試行錯誤しながら伝えていくことが重要であると考えた。このように、言語が異なると自分の言いたいことを相手にうまく伝えることはとても難しく、大変である。だが、一生懸命伝えることにより伝わった時の嬉しさや楽しさを感じることができるのである。

2つ目の「カンボジアの方々の考え」では、日本人とは異

なった考えを持っていて自分自身や家族のことを一番大切にしているのだということを感じた。カンボジアでは退勤時間になったらその1分後には自分の好きなことをしたり考えたりしていたり、子どものお迎えにはたとえ親が医者だったとしても途中で迎えに行っていたりして、日本ではありえないことだと感じた。また、子どもは学校に行く前や行った後に家のために仕事をしていて家族全員で家計を支え合っていると感じた。さらに、渋滞しても怒らないし事故をしてもお互いが笑い合っていると聞いて心の器が広いなと感じた。だからといって日本人が悪い考えであるというわけではなく、お互いの国での考えが異なるからこそ、今回自分の持っている価値観を変えることができた。カンボジアの方々はどんな時どんな場所でも笑顔で接してくれ、楽しんで物事に取り組んでいる。私も自分自身を大切に、「この一年が一番楽しかった」と毎年思えるようにどんなことも楽しんでいきたい。

今回の研修でたくさんの方々と関わり、たくさんの優しさを感じることができた。そして何より、自分の目でカンボジアと日本の違い、考え方の違いを学ぶことができた。また私はこの研修に参加し、自分の力を知ることができ、一歩成長できた。またカンボジアに行き様々なことを学ぶとともに、他の国に行き世界各国の文化や考えについて学んでいきたいと考えた。この研修は私にとって忘れられない経験になり、これからの人生に生かしていけるものになるだろう。



笑って過ごせること ～カンボジア研修を終えて～

人間教育学部 2011210 永江 二菜

私は、2023年2月11日～22日の12日間のカンボジアでの研修の中で、“人はひとりでは生きていけない”と感じた。これまでの私は、自分さえしっかりすれば何でもできる、何かうまくいかないことがあっても自分に非がある、ひとりで責任を取らなければならないと思っていた。今考えるとそれは、楽をして逃げていただけかもしれないと思う。

カンボジアに到着し、初めに見た景色は今でも鮮明である。目があえば微笑んでくれる人たちがばかりの世界。心が満たされている世界であるように感じられた。これより、3点に分けて述べていく。

まず1点目は、メコン大学のみなさんとの関わりである。ここで印象深いことが2つある。1つ目は、自分の時間を犠牲にしても、毎日笑顔でみんなのことを考え、行動してくださる姿勢である。在学生だけでなく、卒業生も毎日来てくださることに感動した。どの方も、どれだけ疲れていても私たちに伝えることなく、最後まで笑顔で助けてくださったこと、お別れの際には、「時間が短すぎた」と涙を流してくださったことは生涯忘れない。それと同時に、自分たちで何とかしようということばかりを考えようとしていた自分の考えの狭さに情けなく感じた。頼ることは悪いことではない。感謝すること、頼ること、頼られること、楽しむことが生きていくうえで大切であると強く感じた。2つ目は、“もぐり”である。勉強をしたいという人に、勉強させてあげたい、と実際に学生として迎え入れておられる先生やその環境に感動した。また、その“もぐり”の学生さん以外の方からも、「勉強することは楽しい」「勉強する時間を作る」と会話の中で聞き、強く残っている。私たちが、義務教育や学業優先という言葉や制度がある世界で生活していることに改めて気がつき、勉強に専念できる時間を大切にしようと思つた。

次に2点目は、ボンタナワックマンパワー（日本語学校）での授業をさせていただいたことである。カンボジアに到着する前からここでの授業をさせていただくにあたっての不安が大きく、前日も緊張で眠れなかった。しかし当日、教室の前に行くとい気に緊張が消えた。笑顔で学習や実践に取り組んでくださる学生さんの姿が非常に印象深く、学ぶことは楽しいことであり、楽しく学ぶことのすばらしさを感じることができた。なお、反省点からなる新たな学びは、学生さんから質問をいただいた際、自分の意見を答えるだけでなく、一般的な捉えられ方を説明すべきであったこと、指導者にとって知識が何より必要であることである。学生さんからいただいた質問としては、「日本人

はタトゥーをどう思いますか。」「関西弁と標準語はどちらが先にできたのですか。」などである。質問をいただくことに感謝するとともに、自分自身の答え方を改めたいと考える。通訳をしていただく間、私自身が何かしているわけではないのにその空間にいること自体が楽しく、自然に笑顔でいたと思う。そうしていると、自然に私の方を見て微笑んでくださる学生さんの姿があった。言語で伝えることができなくても、伝える、伝わることの楽しさを強く感じた。そこで、クメール語を話せてスラスラ伝えられることより、クメール語などわからずとも懸命に伝えることの方がお互いに理解し合おうとし、コミュニケーションが楽しめるのではないかと感じた。勉強がすべてではないということも感じた。さらに、教師ひとりでは授業は成り立たないと感じた。

最後に3点目は、食育・給食プログラムである。リーダーを務めさせていただき学んだことが多い。一人ひとりの働きが多く笑顔につながり、心身ともに健康に過ごすことができたことが大きな成果であり、大成功であったと胸を張っていうことができる。私自身のリーダーとしての務めは、決して良いものであったとはいえない。その理由の一つが、私自身が何かに取り組むことをしてしまい、指示を出す、役割分担するという役目を果たせていなかったためである。ほかにも反省点は多いが、メコン大学の学生さんらも協力して下さり、一人ひとりが自分にできることを実行して下さったおかげで無事に、みんなが笑顔で帰ることができた。ひとりでは成功させるどころか、給食の材料さえ揃えることができていなかったことは確かである。メコン大学の学生さんらだけでなく、同じ奈良学園大学の学生らの協力もなければ決して乗り越えることができなかったと考える。また、簡単に成功させることは出来たとはいえず、何度も本音を打ち明けたり、話し合ったりした。ただ何かに取り組むだけでなく、楽しむことができていたと考える。どんな状況においても一瞬でも楽しめたことに幸せを感じる。今でも関わってくださった方々への感謝の言葉しか出てこない。

以上の3点より、私はカンボジアでの研修から、一人で生きていくことはできない、みんなで楽しんで過ごすことが何より大切であると学んだ。どれだけ辛いことがあっても、一瞬でも誰かと笑えるタイミングを作ることを忘れずにいたい。また、教師になった際だけでなく、いつか親になった際、子どもたち、周りの人たちがみんなが過ごしやすくなる環境づくりとして、どんな場面でもあっても、たった一瞬でも、楽しさを見出せるようにしたいと強く思う。



新たな発見

人間教育学部 2011255 酒井 彩優

私がカンボジア研修に参加して印象に残った出来事は3つあります。

1つ目は、生活環境の違いについてです。日本とカンボジアでは、食べているもの、生活するために必要としている物や物、気候、道路の様子など大きく異なる部分がたくさんあり、プノンペン国際空港に到着した瞬間の印象を今でも覚えています。空港にはたくさんの子供や大人、子供連れの家族が出口で出迎え、出てきた誰かに声をかけるという日本ではあり得ない光景を目にしました。トゥクトゥクなどで生活をしているからこそ、たくさんお金を持ってきていて、トゥクトゥクを呼ぶためのアプリなどを持っていない観光客に声をかけているのだなということを感じました。声をかけられている光景を目の前で見て、実際に自分たちも声をかけられたその瞬間に「カンボジアに来たのだな」という実感を得ることができました。また、日本との物価の差に驚かされました。三日目にCMUの方々とは初めての交流をした時、市場に行き、市場で食材を買ったり、市場での食事をしたりしましたが、市場で買う食材のほとんどの商品が1ドル以下で、市場で飲食をするときも日本円で300円ほどという物価の安さにとても驚いたことを覚えています。さらに、スターバックスに行った際には、日本で600円ほどするフラパチーノが3.5ドルという安さで買ってしまったことにはとても驚きました。この経験から、国によってものの価値やお金の価値は全然違うのだなということに気付かされました。

2つ目は、歴史に対する考え方です。トゥール・スレン収容所や、キリングフィールドに行き、その場の雰囲気を感じ取れたからこそ歴史を学ぶ大切さを実感することができました。トゥール・スレン収容所では、亡くなった方々の写真や、どのような空間で殺されたのか、全て詳しく記載されており、自分がどのような気持ちでこの場にいたらいのかわからなくなりました。悲しいと思ってしまおうと他人事になるのではないかと、泣きそうになった時はなんで経験したわけでもない知り合いでもない自分なんか泣いているのか、殺される前に撮られた写真では笑顔や覚悟しているような顔で映っているが実際にはどんな気持ちで写真を撮られていたのだろうか、ここに来ている他の人達はこの歴史をどう感じているのかなど、考えてもわからないような気持ちや疑問がたくさん浮かんできて、自分の感情がわからなくなってしまった思い出があります。ま

た、キリングフィールドでは、亡くなった方の骨を見て、狭い空間に何百人といたという事実を知り言葉に表せないほど心が痛んだことを覚えています。その中で、自分たちの国の歴史を晒すということはとても勇気がいることですが、それでも世界の人々に知ってもらおうという姿勢から、私自身も自分の過去や行動、心と向き合っていくことが大切であるということに気付かされました。

3つ目は、人の暖かさです。カンボジアは発展途上国のため、貧富の差や、ゴミ山などの衛生問題も山積みであることを学んだ上で、カンボジアの人々は明るく陽気で笑顔が絶えない素敵な人が多い国だと感じました。たった10日間ほどであったが、カンボジアという慣れない国で過ごすために多くの人に助けをもらい、「周りの人がいるおかげで私は楽しく過ごせている」ということに気づくことができました。CMUの方々には特に助けをもらうことが多く、感謝してもしきれないほどたくさん支えてもらいました。10日間ほどの研修の間、テストや授業、仕事があるにも関わらず、毎日私たちのために一緒に動いてくださって、疲れているはずなのにその疲れを一切見せようとせず、いつも笑顔で接して下さって助けてもらっているからこそ、自分がいるのだなということを実感することができました。また、私は笑顔で接して下さるCMUの方々がいたことで研修ではありますが、「楽しい、また行きたい」という気持ちを持って帰ってくることができたのかなと感じています。

私はこのカンボジア研修を通して、他の人への感謝の気持ちを大切にしようと思えて強く感じました。今までもこれからも、他の人がいてさまざまな形で自分を支えてくれているからこそ、今の自分がいるということに念頭に置いて行動するようにしたいです。また、自分に自信がついたと感じています。私は今までこれをしよう、あれをしようと考えていても結局諦めてしまうことが多く、できない自分が嫌で自分に自信がありませんでした。このカンボジア研修は高校3年生の時から参加することを夢に見ており、実際にこうして参加することができて、さまざまな方と出会えて、新たな経験をすることができました。私はこの研修で初めて自分がやってみようと思っていた大きな出来事に挑戦することができました。この経験を糧に、今後も成長していきたいと思えます。

日常生活と授業の関係性

人間教育部 2011209 寺本 風太

カンボジアに行き、私は人とのつながりが密であると感じた。何か作業中にも笑顔で話をし、知らない人と目が合っても笑って話しかけてくる。このように人と人とのつながりがすごく深いものである。このような人とのつながりがどのように授業に関係していくのか、以下で述べていく。

私はカンボジアに行き、実際に授業をして授業後の振り返りをした際にある女性が「カンボジアメコン大学の学生が積極的に意見を表現しているのは、日常生活で他の人との信頼関係が築き、信頼関係によって失敗しても許される雰囲気が出てきているのではないかと発言した。私は、主体的に学ぼうとする姿勢であったり、失敗しても許されたりする環境は、日常生活から生まれてくるものであると考えた。右の写真は実際の授業時の意見交流時の姿である。一人一人が意見を表現して、それに対して自分の考えを発言して、意見交流が深まっていた。質問に対して違うことを話していたこともあったが、その際周りの学生が質問をわかりやすく伝えて、質問に対しての意見を発言していた。このように間違えたとしても、間違いを否定するのではなく、今何を聞かれているのかわかりやすく説明したり、違うことを発言してしまったときでも新たな意見を再度発言したりしている。これはグループでの意見交流だけでなく、授業中でも授業後でもカンボジアの学生が次々に質問をしている姿があった。少しでも疑問になった場合、すぐに質問をしている。質問があった場合、周りの学生も一緒に聞いて、自分の意見や新たな疑問を躊躇なく発言していた。このカンボジアメコン大学の授業外では、一人でいる時間よりも他人と会話する時間が多くあり、他の人が話をしている中に入りに行き話をしてることが多かった。右の写真はカンボジアメコン大学と一緒に料理をした際の姿である。学生の一人が話をしているときに、カンボジアメコン大学の学生は話をしている人の方に顔を向けて話を聞こうとしている。このように普段から話を聞こうとしている姿勢があり、話をする側も話しやすい環境となっている。カンボジアメコン大学の学生は日常生活で他の学生と多くの時間を過ごして、授業でも日常生活と同じような雰囲気で授業に取り組んでいることから、発言しやすい環境となっていたと考える。

次にカンボジアメコン大学の学生ではなく、ボンタナワックマンパワー（日本語学校）での学生の様子を取り上げる。ここでは一緒にカンボジア研修に参加した女性学生

が授業をした。授業の観察者として、日本語学校の学生の姿を見た。カンボジアメコン大学の学生と同様に、積極的に発言したり、質問したりしていた。右の写真は授業の姿であり、印象深い写真である。これは授業者がAとBのどちらの意味があっているのか問題を出したところ、Aの方が左の写真であり、Bの方が右の写真である。授業者が2回聞いたところ、1回目にBを選んでいる学生が少なかったが2回目でも同じように2人手を挙げた。Aだと考えた学生が大勢いたにも関わらず、Bだと考えた学生は続けてBに手を挙げていた。周りの学生は笑っていたが、2人の学生を馬鹿にするように笑っているようには見えなかった。このことから、自分の考えたことが少数であっても周りの人に左右されず、堂々と答えている姿があった。ここでも授業内で間違えても周りの学生が否定するのではなく、認めている環境があった。授業後の学生の姿は、授業者に話しかけて行ったり、学生同士で話したりしていた。授業で質問した学生がいた場合、周りの学生は質問した学生を見ていた。この学校でも授業以外の学生同士の距離が授業にもつながり、質問をしやすい環境であったり、失敗しても認められたりする環境があったと考える。

この2つの学校から私は授業外での関係が授業での環境に直結していると考えた。このことから私は、児童が授業を主体的に参加し、一人一人が発言することができる環境や失敗しても認められる環境を作ることは授業以外にも関係していると考えた。教師は全員が授業に取り組むことができる環境を作るためにも、授業以外の児童の様子を見て、状況に応じて生徒指導であったり、教育相談をしたりすることが必要であると考えた。教師になったときに、授業以外から児童の姿を見て、児童同士の関係を大切にしていきたいとカンボジア研修を通して強く考える。





カンボジア短期研修を通して得た学び

保健医療学部 2131116 高橋 莉佳子

研修を通して得た学びとして特に印象に残ったことが2つあった。

1つ目は、日本の病院とカンボジアの病院の違いである。基本的な医療行為は同じであるが、栄養面や安全安楽といった点においては、大きな違いがあった。病院では入院食は提供されておらず、家族が病院前の屋台で買うなどして持参していた。日本では病気であれば食事制限は絶対条件の一つであり、それらを全て考慮して栄養士含め医療従事者が食事を提供してくれる。一方で食事を屋台や家から持っていき、一緒に食べるカンボジアでは栄養面が家族や周りの人に委ねられているということが確認できた。また、日本の診療所では入院もできず、手術が必要となった場合は大きい病院を紹介されるが、カンボジアの診療所では特別な急を要する場合、入院や手術をすることができる部屋があったことにも驚き、日本と異なる点があると感じた。さらに、分娩台が右記写真のように銀色の板の状態であったことにも驚いた。分娩時お母さんは痛みから、暴れたりすることがあるためこの状態であると自身の感覚や日本で基準とされている“安全”といった点からみると危険な状態であると感じた。クッションの素材のものであれば動いた際でもカバーできると思った。そして交通量が多く、救急車が渋滞に巻き込まれなかなか進めないといった状況も見受けられた。より多くの命を救うためにもこのような改善が必要なのではないかと感じた。良いなと思った点も多くあった。例えば、日本では今コロナの影響により小児科でさえも家族の方の宿泊が制限されているといった事実があるため、カンボジアでの、入院中でも家族の方と親密に関わることができる点において良いなと思った。また、タバコのパッケージが非常にインパクトのあるものであったことに驚いた。パッケージを見ただけで、喫煙することで身体にどのような害が生じるのか、また、自分の子どもを妊娠した際どのような状態の子が生まれてくる可能性があるのかを瞬時に理解させるようなものであった。見るだけで、「うわっ」となるものであり、買うのを止めておこうという気になる良いものだと思い、日本でも取り入れていくと健康日本21の目標喫煙率に近づくのではないかと考察した。

2つ目は、人と分かり合える、分かち合える喜びである。食育プログラムでは、リーダーを中心として、メコン大学の学生と共に食費や分量を考察しながら子どもたちに喜んでもらえる食事を提供できるように協力して一生懸命に取り組むことができた。買い出しや仕込みも担当別に一生懸命手際よく実施することができた。子どもを喜ばせたい、日本の美味しい料理を食べさせてあげたいといった強い気持ちがマッチして、切磋琢磨し何が足りないのか、どうすれば寄り良いものにしていくことができるのか状況把握をきちんと出来ていたからだと感じた。英語は少しわかっ

たとしてもクメール語は全く分からず、意思疎通が難しく感じることも多々あった。しかし、何としてでも伝えようとジェスチャーや物を使って表現することで伝わり、気持ちを共有することの楽しさを再確認することができた。グローバル社会になり、日本の病院でも益々海外の方とのコミュニケーションが必須になる現状でこういったノンバーバルコミュニケーションの経験を活かして、積極的に自ら動くことができると自信がついた。また、「この患者さんは今何を思っているのだろうか」と表情や仕草から読み取る力がついたことは看護に通ずるものがあり、この成果は大きいと感じた。患者さんと看護学生とで考えていることが違っており、ズレが生じていたことで患者さんに怪我をさせてしまうかもしれないと思うと、恐怖を感じることもある。しかし言語が通じなくても、自分は何を伝えたいのか、相手がきちんと自分が思っていることを明確に理解しているのか、逆に自分自身も相手が伝えたいことをきちんと理解できているか考え、気持ちを共有することで分かり合えるのだと気付くことができた。特に、自分がこれから何をしようとしているのか、患者さんに対してはどのような行動をとることを指しているのかを明確にすることを意識し、情報の伝え方、話し方についても練習をしていこうと思う。メッセージを共有し、分かち合い、考えていることを一致させていくことが大事だと再確認することができた。

子どもたちは習った英語を教えてくれたり、歌を歌ってくれたりとても可愛かった。折り紙を折ってプレゼントした際には日本語で「ありがとう」と言ってニコリ微笑み、嬉しそうに遊んでくれる姿を見て心が温かくなった。「ありがとう」は本当に心に染みる。

成果発表を通して、今回のプログラムから得たこと、また課題となったことを分析し、次回に活かす学習ができたこともより深い思考力や行動力に繋がったと感じている。カンボジア研修での多くの学びは私にとって、将来の道を新たに指示してくれるような経験であった。今後も勉学に励み、これまで以上に海外で活躍できるような助産師になりたいと思った。また、研修を通して人の温かさを非常に感じた。そこにはいつも笑っている素敵な顔があった。価値観や考え方は違ったとしても“笑顔は世界共通”なのだと身を染みて感じた。楽しい時間を共有することでコミュニケーションの手段を増やしもっとたくさんの人と話したい、誰かの役に立ちたいといった感情が芽生えるのだと感じた。また、お互い生きていくための励みになるのだと強く感じた。

最後に、この研修はカンボジアメコン大学の生徒の方や卒業生の方の手伝いがあったからこそ成り立っていたと強く感じている。本当に感謝の気持ちでいっぱいである。そして現地の子どもの笑顔、親切で心優しい人たちとの出会いは一生忘れられない宝となった。

自分の足で目で経験することの大切さ

保健医療学部 2131123 西脇 薫子

今回カンボジア研修を1週間通して変化した点、学んだ点等が2点ある。

1つ目の学びは医療制度が日本とは異なること。3つの病院を見学させて頂いた中で個人的に驚いたことが1つ目の病院を見学中、注射針が注射容器に刺さったまま、酸素ボンベが日本よりも2倍程度大きかったこと。

カンボジアの医療と日本の医療を比較すると診療所であっても待合室や仮泊りの部屋、診察室など区別され物品が清潔に保たれ十分に保たれている病院が日本ではほとんど存在する。それはカンボジアでも存在したが多少の清潔を保つ操作や意識は日本と比べ清潔への感覚や認識が国によって異なるのかと学んだ。日本では入院食が出ることはほぼ当たり前のように出されるがカンボジアでは医療食というものはほぼ存在しなく、家族が持ち込んだものを食べるという医療文化に驚きを感じた。他にもカンボジアでは屋台で買うことはほとんどであること、中国・日本といった国際医療・病院が日本よりも多く充実していた。

大きな学びとして日本では当たり前にあるような医療や医療物品がカンボジアでは存在しないことがあること。カンボジアという国や地域ならではの病気があり、生活様式も日本と異なる。その特徴を捉えた医療が提供されているとケアプログラムを通して大きな学びを得た。そして自身の夢である海外で看護師として働きたい気持ちがさらに強まり、他の国の医療も学びたい、知識と技術が豊富になればカンボジアで働いてみたいと気持ちが変化した。

2つ目は人に触れる・関わることの大切さ、多文化にふれることの大切さを学んだ。

カンボジア研修を通してカンボジアを一言で表すなら、『笑顔』。そう言っていいくらいメコン大学の人たち、トントローチ学校の子供たち、すれ違った人など全ての人が心からの笑顔であったことにものすごく感動した。すれ違った人全員に笑顔向けると笑顔で返ってくること、手を振ると手を振り返してくれることに心が温まった。日本では作り笑顔が多いすれ違った人に対して笑顔や手を振ると必ず返してくれる割合は少ない。しかしカンボジアでは全ての人が笑顔で返してくれる。それはカンボジアの人は人との繋がりを相手を大切、家族や友達を大切にしているからだと学んだ。

個人的に嬉しかったことがトントローチ学校では初めて会ってすぐに病院見学に行こうとしたときに子供たち全

員がついてきてくれたことが人懐っこくフレンドリーだなと実感した。こういうのは中々日本では経験できないため驚きと喜びを感じた。言葉がうまく通じなくても物を介してでも少しの言葉や動作だけでも人は繋がっていくのだと学んだ。それはメコン大学の人たちと同様で、中々思うように言葉が通じない、伝わりにくいことも多々あったが、自分なりに表現し伝えたい気持ちを言葉にのせて伝えようとするお互いの気持ちがあったからこそ短期間ではあったが繋がれたと思う。諦めるのではなく必死に何か伝えようとする姿勢が大事だと研修を通し学び、今後も人と関わる上でその姿勢は大切にしていこうと心から思った1つの大切な学びであった。多文化に触れるという大切さを学んだが、これは食や命のディスカッションなどを通して強く感じた。キリングフィールドやディスカッションで命の価値観を知ることが出来、食も風景も文化も自分の五感を通して「このように大切にし、こういうのが好きなんだ」と研修を通して感じる事が出来た。多文化に実際触れることで自分の世界観が広がるということを研修を通して実感した。

結果学ぶことは沢山あったが、結論自分の足で目など五感を通して経験することが大切だと学んだ。正直最初はカンボジアの印象はインターネットだけの情報のみであったため怖かった。しかし実際自分の目で肌で実感して以上のような学びがあったことからインターネットなどの情報よりも自分で動いて経験し、感じる事が自分の世界観が広がり、人との繋がりがってこうやって生まれるきっかけになるのだという考えが今回の研修を通して生まれた変化であり学びである。将来もう一度カンボジアを訪れたいと思うほど多くの学びがあったため充実した研修であった。





カンボジア研修において考えたこと・感じたこと

保健医療学部 2131134 三浦 理彩子

研修に参加する前のカンボジアのイメージとして、発展途上国からあまり発達していないイメージが強かった。そのため、食べ物や道路、衣服など思いつくものほとんどが整っていないのではないかと想像していた。また人柄についても、日本があまり他人に干渉しないように、同じアジア圏であるカンボジアの人も他人に干渉する・興味を持つことが少ないのではというイメージであった。しかし、実際にカンボジアに行って現地の人と触れ合い、数日過ごす中で、今までのイメージが一瞬にして崩れた。

第一に、カンボジアの人達の人懐っこさについて。日本人は初めましての段階から相手に興味をもって心から話しかけることが少ないように思う。作り笑顔で社交辞令が基本となって会話が成り立っていることが多いだろう。しかしカンボジアでは、市場の人や現地の大学生だけでなく小学生までもが私たちを見るなり駆け寄ってきて、言語が通じなくても笑顔とノリの良さで何となく会話が成り立つ。もちろん、外国人であることに物珍しさを感じて興味津々だということも考えられる。そうであったとしても、会話をするというチャレンジ精神が素晴らしいと感じた。実際に、現地の学生は私たちのために自分たちの仕事を休んでまでお手伝いをしてくれたり、質問したら厭な顔一つせず答えてくれたり、「大丈夫?」と頻繁に気にかけてくれたりするなど、人のために尽くそうとする優しすぎる精神が日本とは少し異なる考え方だと感じた。

また、人に対して会話を試みるなどのチャレンジ精神を育む環境も関係があると思う。両親や地元の人々などが他人に対して心を開いて会話をしていることを幼いころから見て育つが故に、成長すると共に自然と他人に心を開くのではないかと推測する。日本では、初めから心を開いて会話をすることが難しい人も珍しくないため、私は、このような環境が日本にあるとずっとフレンドリーな社会になり、会話がしやすくなったり楽しい社会になるのではないかと考えた。

第二に、日本製品の普及について。カンボジアに着いてまず初めに日本製品の多さに驚いた。カンボジアは電車などの交通手段ではなく、車・バイク・自転車を移動手段として使用している。トヨタをはじめとする日本の会社の製品の使用が多く、また大型商業施設であるイオンもあり、日本を感じる場面があったように感じる。世界のトヨタとして日本のみならず世界に通用することは知っていたが、初めて自分の目で確かめたため、日本製品を通して世界と関

わっていることが印象に残った。また、交通量が多いことも関係があるだろうが、日本とは違って急に止まれるスピードで走行して曲がり角や十字路での事故を防いでいるのだろうと考えた。バイクが視野外から急に現れたりするため、頑丈な日本製品が使用されているのだろうと推測する。

第三に、防犯意識の高さ。カンボジアではひったくりや誘拐などが身近に存在する。特にバイクに乗っている際にカバンごと盗まれて怪我をするという事例が多いようだ。そのため、赤信号で止まったタイミングや背後から近づいてくるバイクなどを警戒しながら運転しているようだ。日本では物を置いて座席確保が出来るほどであるため、物が取られるということに対して意識が低い。日本は治安が良い国として知られているため、他国と比べればそこまで防犯意識をもつ必要はないかもしれないが、ひったくりなどをはじめとする犯罪がないわけではない。そのため日本でも防犯が必要となるため、見習える部分があると感じた。

日本とは異なった部分もありながら基本は同じであるカンボジアにおいて、これらのようにいくつか感じるものがあった。人懐っこい性格からは、人懐っこいが故に生じる人とのつながり方や心を開くまでのスピード、尽くそうとする優しさなどが考えられ、日本にはないような性格であった。そのため、もし日本人がカンボジア人のように優しくなったら、社会は今まで以上に円滑に回るのではないかと考えた。「優しくしなきゃいけない」、「嫌な顔をしないようにしなければ」などのように無意識のうちに思っていることも、カンボジアでは感じさせないぐらい優しい印象であるため、心から優しくなるためには環境が変化しないと難しいと強く感じた。そのため、子供たちには家庭のみならず地域の人々や学校生活での環境なども含めた環境整備・提供というものが重要となると考える。また、防犯の意識からは、犯人が悪いことに変わりはないが、常日頃から意識して取られない・狙われない対策を行うことが必要だと考えていた。しかし防犯には幼いころからの教育が大切で、犯人にならないための教育と被害者にならないための教育の両方が必要で成り立つと考えるようになった。

カンボジア研修を通して感じたことを活かして、他人に対する対応など看護にも取り入れることが出来る部分は活かして、自分の成長を促そうと思う。また、社会に出てからもこの経験を思い出しながら自分はどう動くべきなのか常に考えていきたいと思う。

人と人とのつながり

保健医療学部 2131206 鍵政 美凜

このカンボジア研修を通して、人と人との繋がりというものを強く感じました。メコン大学の学生さんと交流する場面では、お互いに言いたいことが伝わらないことも何度かありましたが、頑張って伝えようとする姿また理解しようとする姿が非常に暖かく、素晴らしいものだと思います。

食育プログラムで訪れたトントローチ小中学校では、言葉が全く伝わらない中、少しの英語やとても簡単なクメール語だけで、話したり仲良くなることは難しいのではないかと考えていましたが、子供たちははじめから笑顔で近くに来てくれて、手をつないだり、名前を聞いたり、目線やジェスチャーで言いたいことを表現するなど多くのコミュニケーションをとることができ、言葉で会話をするだけでなくコミュニケーションではないということを強く実感しました。看護を学んでいく中での様々な場面で、患者さんとの非言語的なコミュニケーションが非常に大切と言われてきましたが、今までその意味を分かったつもりでしたが、全くわかっていなかったのだと再確認できました。その人のことを知ろうと強く思いながら関わることで、その人の些細な変化や言いたいことをすぐに理解することができ、手をつなぐことやハグをすることなどの触れ合いは、心が温かくなり、安心することができると感じました。特に緊張しているときに腕を組んだり、手をつないでくれてとても安心したことが記憶に残っています。

また道ですれ違う子供たちやお店の人、カンボジアに住む人たちの笑顔がとても素敵なものだと感じました。笑顔で手を振ってくれるとこちらも笑顔になってしまいます。このカンボジア研修を思い返してみると相手の笑顔に影響されて自分も笑顔でいた時間が非常に長かったような気がします。笑顔から得ることができる力はとてもかけがえないもので、自分だけでなく周りも笑顔にすることができるのだと実感しました。

これらの経験は、日本では決して味わうことのできないカンボジアに行ったからこそ得ることができた学びだと思います。

ケアプログラムでは、発展途上国の医療について学ぶことができました。カンボジアに来る前までは、日本の医療を当たり前として学び暮らしてきたために、他国の医療のレベルというものが全く予想がついていませんでした。インターネットから学んだカンボジアでの医療の疑問として、栄養管理はどうしているのか、病院での清潔・衛生面

での管理はどうなっているのか、また日本との大きな違いはあるのかということが浮かび上がりました。実際にカンボジアの医療現場を見てみると大きな病院や診療所、またそれが設置されている場所によっても様々な環境でした。まず初めに栄養面では、特別な病院食などはなく、塩分指導や水分制限など病気によって必要な食事管理はほとんどなく、自分で食事を準備するということを聞いて非常に驚きました。そもそもカンボジアでは栄養について学ぶ機会というものがなく、大人も子供も食事をあまりとらないのにコーラやエナジードリンクばかりを飲んで、胃や腸の病気になるなどの日本ではあまり見られないような特有の病気がある事を知りました。また衛生面では病院ではマスクの着用率が高く、バイオハザードマークでの感染予防対策や無菌操作など清潔の概念というものは、日本と違いがあまりないと感じました。またカンボジアの病院では、患者さん家族との距離がとても近く、食事を持ってきてくれたり、病院で寝泊まりするなど、日本は今小児科でさえも家族と一緒に泊まることができないという状態なので、そういった面で、とても良いと感じました。しかしカンボジア内でもお金持ちの人しか行けない日系の病院と地元の診療所など医療の格差があるという現実を知り、貧富の差に関わらず、すべての人が平等な医療を受けられるよう、発展途上国と先進国の医療の差をどの様になくしていくことが出来るのか、自分にはできないことがないのか考えていく必要があると痛感しました。





2022年度 Cebu語学研修を終えて

人間教育学部 教授 森 一弘

人間教育学部では、2016年度に「国際教育実習プログラム」として短期留学としてサンフランシスコに於いて(2週間)はじめて実施した。

その時の目的は、4点であった。

1. 学校現場で活躍できる教員養成：英語の教科化に対応できる教員育成。(授業力・企画力・多様性・コミュニケーション能力)
2. 学生のニーズの応える大学：海外留学等に参加したいと考えている学生へ対応する。(広報戦略の一つとなる)
3. 教員採用試験対応：英語ができる学生の育成。
4. 学部の定員増に向けての布石とする。

翌年の2017年度には、この目的でカナダ、バンクーバー(2週間)で実施した。

2年間の実施を振り返り、目的をより語学習得を主にし、英語力を伸ばすことが必要ではないかというように修正し、2018年度からはフィリピンのセブ島にあるECCセブ校で4週間「セブ語学研修プログラム」を実施した。

翌年2019年度の実施では、Covid-19の世界的に感染が広まり、はじめの1週間の滞在のみで帰国命令が学長より出された。その後2年間は、海外研修は実施することができない状況となった。

2022年度は3年ぶりに、セブ語学研修が再開することができ、4名の学生が希望し実施した。海外での研修の利点として、日常生活や大学での学修から切り離され集中的に語学力を高めることができ、国内では実現が難しい英語漬けの日々を過ごし、短期間でも学習効果が期待できるものである。授業はもちろん、生活に至るまで英語になり国内での実施より有効であると考えている。

今年度の参加学生の振り返りには次のような内容があった。

「私の英語の成績は低迷しており、正直、かなり苦手な科目でした。それでも、洋楽が好きで、英語を話せるようになったらいいなあという思いはあり、これまで色々試してきましたがなかなか上達しませんでした。そんな私が、今回セブ留学に参加して、変わりました。英語を話せるかと聞かれると、笑顔でYes!と答えられるようになったのです。成績がとびぬけて良くなったというわけではありませんが、いつのまにか苦手意識がなくなっていて、今では、英語が自然に口から出るようになりました。」

語学以外での話題であるが、次のような振り返りもあった。「そしてもう1つはセブ島の文化と経済を肌で感じる事ができたことが私にとって大きな学びになった。週末にボランティア活動に参加しスラムに住む子どもたちに炊き出しといらなくなった衣服のドネーションを行った。日本では考えられない日常がセブ島の子どもたちにとっては当たり前で自分がいかに小さな価値観に囚われて日々過ごしているのか、現地に赴いたことでその国や人の価値観に触れ多様性を学ぶ大きなきっかけとなった。」

参加した4名の学生は、充実した4週間を過ごしてくれた、途中、体調不良に見舞われた者もいたが、周りの支えで乗り切っていた。人間教育学部として育てたい人間力の一つである、多様な見方、分け隔てることなく接していくことができるコミュニケーション力、そして何より、英語力を高めることができた研修となったことを報告しておく。



セブ島語学研修で学んだこと

人間教育学部	1911227	石原	義規
人間教育学部	1911317	津野	一樹
人間教育学部	2011437	菅	智慎
人間教育学部	2111506	木津	史晴

2月5日から3月4日まで私達はセブ島語学研修に参加した。英語には前から強く興味があり、奈良学園大学のセブ島語学研修があることも知っていた。しかし、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響で2年間のセブ島語学研修の開催がなかった。そして今年、3年ぶりの開催で待ちに待った思いで参加に踏み切った。

研修に際し、今まで英語が苦手であり不安であったが、完璧な英語じゃなくても意思疎通ができることを体験することができた。しかし、より議論をしたり、自分の思っていることを的確に伝えたりするためには、語彙数を増やし、慣用的表現を身につけていくことが必要であると改めて感じた。

今回の研修では特に、話す、聞くという能力が伸びたように感じる。話すという部分では、1週目の時と最終週では、先生とコミュニケーションをとるときのスムーズさであったり、伝わり方であったりというのは、確実に進歩していたように感じる。そして、聞くほうでも、今までは、意味がわからなかったり、聞き取れなかったりしていたところが、今まで以上に聞き取れるようになったと感じている。人とコミュニケーションをとる上で大切となる英語力を伸ばせたと考える。

英語力については平日月曜日から金曜日までの8時から17時の1日コマのECC独自のカリキュラムに沿ってみっちり学習した。初日は先生の会話も聞き取れなく理解できずに自分の英語力に愕然としたが4週目には先生の会話の内容がきちんと理解できるようになり、英語力の3つの分野である。ライティング・リスニング・スピーキングの全体的なレベルアップを肌を感じる事ができ、自分にとって非常に有意義な時間することができた。特に毎週金曜日のCliff Edge (崖の淵に立たされた) という英語による発表は大変有意義な取り組みであった。話す内容を考え、マンツーマンでその内容を英語表現にし、発表の練習を行うこの取組は、英語力を高めるものであると感じた。

研修で、現地の人、他大学や高校生と出会いは私達にとって、新鮮でよい大切な思い出となった。フィリピンの先生は、先生というより友達のような距離感で接して下さったり、休憩時間でも学生のところに来て会話して下さったりしてくれた。精神的な部分で嫌にならないように

振る舞ってくださり嬉しかった。身体の心配や、薬を持ってきて「使っていいよ」と本当に親切で温かい対応であった。異国の地で見える景色、食べ物、人、またトイレの違いなど、本当に一つ一つのことを何もかも刺激的で夢のような一ヶ月を過ごすことができた。英語の勉強をすることが好きではなかったが、勉強漬けの毎日にも関わらず、それを苦と思わず楽しく過ごす事ができたのは間違いなく周りの皆と、一番は先生のお力添えがあったからだと感じた。

留学期間中には、街中にも出かけ、そこにもたくさんの学びがあった。中でも、スラム街で子どもたちと交流する機会が印象的であった。スラム街からは、きらびやかな高級住宅街や高層ビルがすぐそばに見える。残酷なギャップに、茫然と立ち尽くしたが、子どもたちは、目をキラキラさせて寄ってきてくれるのである。フィリピンでは教育の無償化されたものの、スラムの子はノートや鉛筆を買うお金がないので、学校へ行かず、親の手伝いをしている子が多いとのこと。親は英語を話せないの、学校へ行かなければ、英語は覚えられず、英語を話せないと、なかなか職に就けない現実がある。このままでは、貧困から抜け出せないんじゃないかと思っても、私達が自分のシャープンをあげて解消するような問題ではない。貧富の差の厳しすぎる現実を目の当たりにて、衝撃を受けたが、せめて今できることとして、その日は、子どもたちと全力で遊ぶことであった。日本でも、親ガチャとか、子どもの貧困が問題になっているのは知っているが、今までは字面でしか見ていなかった。これからは、現実を見て向き合っていかなければと考えている。

このセブ島語学研修を通して私達は、広い視野を持つことができた。今いる環境が全てではないということは頭ではわかってはいたけれども、海外でそれを確認することができた。この研修をモチベーションにして、今後も英語学習を継続し語学に励みたい。また、フィリピンの国民性や文化が今回で好きになったので、また必ず訪れボランティア活動にも参加したい。

今回、このような経験をさせていただいた大学には改めて感謝する。これからも自分を持って強く笑顔で、出会いを大切に過ごしていきたい。



タイ王国 チェンマイ大学での 研修再開によせて

保健医療学部 教授 堀内 美由紀

3年ぶりの開講となった国際看護論演習は、9月18日から25日の日程で実施され、学部生6名が参加し、大学院生2名も同行しました。現地のCOVID-19の感染者数や医療の提供状況、日本政府の方針などを継続的に追うのは大変でしたが、県内他の大学に先駆けて海外研修の再開することができました。

チェンマイ大学は、1964年に創設された北部随一の総合大学であり、タイ初の女性首相など多くの著名人を輩出しています。現在は21学部3万2000人を超える学生数となっています。メインキャンパス内には、郵便局からコインランドリー、食堂、カフェ、コンビニ、公園まで、備えられています。キャンパス内は電動式のバスが走り、私たちもそのバスに乗って広大なキャンパス内を回りました、緑豊かで、湖や噴水、伝統的な建造物などインスタ映えしそうな場所もたくさんありました。看護学部は医学部看護学科から分離して50年という記念の年でいくつかのイベントが企画されていました。大学病院のすぐ横に校舎と寮があり、実習服姿の学生の皆さんを多く見かけました。校舎は古い建物ではありますが、超高機能シミュレーターによる演習室が複数あり、VRを用いた演習なども行われています。COVID-19で登校できなかった間は演習で必要なものを郵送で送っていたこと、実習の機会を奪われた学生の補習も積極的に行われていること、などの説明に学生たちは敏感に反応しており、おそらく演習や実習時間が最も少なかった学年でしたから、学生たちの「羨ましい」という言葉に私自身もハッとしましたし、教育現場の有事への備えについて改めて考える機会となりました。

現地での研修プログラムは3年前のものをベースに、こちらからリクエストした「タイ王国でのCOVID-19対策と現状」、「チェンマイ大学学生の様子と大学の支援」についても加えられたオリジナルプログラムとなりました。本学の研修開始前1カ月間に報告されたチェンマイ県のCOVID-19新規感染者は10人前後とのことでした。抗原検査キットはコンビニなどで容易に購入でき、そうした個人で行っている検査の「陽性」はカウントされていないようでした。観光に力を入れているタイでは、すでに多くの外国人が入国していましたし、マスク着用義務がなくなって3カ月が経過していましたが、日本と全く変わらずほとんどの人がマスクを着用しており、本学の学生たちのマスク着用も違和感なく安堵しました。

プログラムに挙げられたテーマは、事前準備として日本の現状と合わせて分担して調べ、資料を作成し共有しました。「講義は基本英語で聞く」をルールとしましたので、過去の資料を訳したり、日本の現状を英語訳したりという準備もしました。事後アンケートで、総合評価平均4.8 (n=8, 5点満点) でしたが、その根拠について「事前学習していた内容が授業で多く活かされた」「最初は、日本語の通訳に頼ってしまいたいという気持ちがあったが、日本語の通訳があると頭に入りづらいことを実感した」「英語での講義では完全に意味を理解することが難しい場合でも、1つずつの英単語を追いかけて聞いているので頭に残りやすいと実感した」「1週間を通して初日から最終日にかけて聞き取ることができる英単語が増えていったと感じている」と準備の大変さ以上の達成感が感じられていることが示されました。最もよかったプログラムとしては、「HIV/エイズへの取り組み」、「コミュニティヘルス(医療制度を含む)」、「伝統医療」と様々でしたが、「物事を判断する際に日本の医療形態や制度からの物差しでしか測ることのできない視点しか持っていなかったが、実際に海外での風土や文化などの背景から精査できるようになった」「事前学習した内容よりも今はHIVエイズの予防の運動が広がっており、(中略)日本とは違う価値観があることを学べた」「信仰と病院が深く関係している医療の現場などを学ぶことができ、住民同士や地域の特徴を活かした支援の実際は現地では学ぶことができないような内容で自身の看護の視野を拡大することができた」と学生自身が聞いたことや見たことを事前に学習したことを使って考察し、自分の意見を持つことができるようになったのは大きな成果と考えています。「」内は、全て原文のまま。

学生たちのまとめで発表したスライドを掲載させて頂きます。先にHP上にアップしている記事も合わせてご覧ください。(https://www.naragakuen-u.jp/faculty/medical/special_subjects.html)



国際看護演習事後レポート



「研究での学びの振り返り」と「今回の海外研修参加をとおした経験や学びをどのように活かすか」を含み、皆さんの考えを書いてください。

1931105 植田 愛都

私は、①タイの伝統や環境に触れながら、国際的視点から健康にどのような医療や支援活動・役割が求められるかについて考えることができる、②日本とは違う看護教育や医療の現状を理解し、事前学習や現地での学習を統合し、自身の国際的な視点における看護師の役割、在り方への視野を広げることができる、を研修の目標とした。

実際に現地の伝統医療であるマッサージを体験した。タイマッサージは伝統医療として国から認められた医療の一つであり、地域住民は伝統医療により症状が緩和されると語っていた。日本にも正月や願い事で神社や寺に行く古来の文化があるが、タイの伝統医療も先代から継承され現代まで続くものであり、信仰と深い関係がある。その人らしく健康に暮らすための支援として、看護ケアにおいても、そうした文化や歴史的背景を踏まえることの大切さを再確認した。またタイではコミュニティがとても緊密であり、家族だけでなく地域住民で助け合い、育児や療養を支えていることを学んだ。例えば、LGBTQの方への理解が進んでいる背景には、HIV/エイズの大流行の経験から1人ひと

りのHIVに対する関心が高く、性教育などが地域住民などでされていることがある。また、チェンマイ大学における看護基礎教育では、最新の技術を使った看護演習の実施ができる環境やタイではバイクでの移動手段が多く、演習の中にヘルメット着用をイメージした特徴的な演習があること、COVID-19によるカリキュラム見直し・夏期の演習室開放があったなどの講義を受けた。それぞれの国の歴史・文化や社会・経済状況の違いにより日本行えることがタイではできないこともあり、逆にタイでできることが日本でできないこともある。それぞれの制度がどんな背景があって整備されているのか、それぞれの国でどのようにしていくことが疾病の予防や平等な医療を実現できるのかを考えることが必要であると学んだ。

研修で得た経験や学びから、卒業研究のテーマとしている、外国人が抱える他国での困難や看護師の地域での役割に関し考察を深め、日本での外国人に必要な看護のあり方を考えることができたかと考える。

1931119 新屋敷 美奈

「タイの伝統や文化、政治・経済的な要因から健康に対して与える影響について日本と比較して説明することができる」という目標に対して、講義の中でタイのCOVID-19流行下における国家の理念、そして看護学生の教育の継続への取り組みに関する学びがあった。その中で、チェンマイ大学学生のCOVID-19感染の理由として昼食が主な要因として挙げられていたが、タイの「共有して食べる習慣が影響した」と分析されていた。こうした文化的背景が健康に影響することを再確認した。一方、タイと日本の健康指標において、主要な死因が悪性新生物によるものが多いことは日本と同じであると学んだ。また、平均寿命は日本と比較するとタイの方が10歳ほど低い。だが、高齢社会であることには変わりないため、日本と同様に高齢化に向けた医療制度が重要となってくると考えた。タイではマラリアや結核等感染症による死亡者も目を引くが、日本では主要な死因順番を変えるほど多くはない。この背景に

は文化的な背景に加えて、社会的背景として、タイでは富裕層と貧困層の差が大きい経済的な背景もあると考える。タイにおいて存在する健康課題に対して、例えば、HIVのような性感染症であれば、今回視察したMPlus財団が活動しているように知識・予防具の普及・配布、検査受診の促進をしていくことが必要であり、これらに対してアクセスしやすい環境を整えていくことが重要である。

海外研修に参加して、日本と他国(タイ)の医療制度の違いを学ぶことができた。私たちは、日本での制度が当たり前前の状態になっている。だが、他国の制度を実際に見ることができ、それにより日本の制度の素晴らしさ、乏しさを考える機会にもなった。この経験を、日本での看護において患者・家族が安全安楽に療養生活を送るためにはどのように制度を使うか、より良い看護の展開に必要な制度はどのようなものか検討を続けることが必要と考えた。



1931114 香田 斐南

タイの医療では日本の厚生労働省に相当する保健省が管轄しており、公衆衛生も管理している。HIV/エイズを主とする性感染症では、NGOなど地域の協力のもと、感染拡大防止の対策が取られていることが学べた。性感染症の予防について、小学校からではなく幼稚園から教育を行っており、低年齢での性について学ぶ機会は増えていることが説明された。性についての考え方は親の影響を大きく受けるので、親世代の教育を続けることも重要であると考えた。性教育については、生殖年齢だけがターゲットではなく、幼少期や学童期も特に重要になると考え、人の体の仕組みを知ることの一環として教育をしていくことが重要であると考えた。また、性感染症の感染拡大には、男性の同性愛者の性行為、セックスワーカーの存在が深く関係している。経済的な問題で、セックスワーカーとして従事する人たちがいる現状から、正しい知識をつけた大人が増えるように、教育は重要であると考えた。経済的問題は、医療施設や人材確保にも大きな影響を与える。貧困地域の村に

は診療所や病院が少なく、医者は週に1回の回診をしていることを知った。貧困地域と大都市での医療の格差も問題になっていることがわかった。貧困地域では医療従事者の数も少なく、急変しても治療する人が少ないということになる。Health for Allやユニバーサル・ヘルスカバレッジ(UHC)の考え方で、全ての人に必要な医療を提供するためには、その格差は無くしていく必要がある。

日本にいて学ぶことが全てだという考えではなく、広い視野で看護を考えられるように活かしたい。LGBTQに関する理解の普及や、幼少期からの性感染症の教育についても具体的に考えられるようにしたい。実際に自分がLGBTQに関する講習をしたり、チェンマイ大学で見たようなVRの機械を作ったりはできないかも知れないが、周りで偏った価値観を抱いている人、そのような人に偏見の目を向ける人たちに対して、自分が経験したことを伝えることはできると考えた。

1931131 幡野 歩花

タイでは、大規模なHIV感染が生じたことを事前学習として学びそれを踏まえて、講義では、子どもとその親それぞれに向けたアプローチについて学んだ。過去の大規模な感染があったからこそ、タイの人々にとっては、HIVが身近な病気であると考えの人が多く、検査やHIVに関して考え方が日本とは違うと感じた。日本においては、HIVの検査にネガティブな気持ちを持っていることが多く、また、身近な人との性行為であれば大丈夫と考えている人が多い。タイにおける若者に感染者が多い理由では、「初めての性行為であればかからない」と考えられていることがある。さらに、男女の権力差や性交渉に関する友人間での競争や禁止コンテンツの流出による影響があり、早い性教育の必要性がある。専門職による性教育も必要であるが、子どもにとって一番近い存在である親からのアプローチも重要であると学んだ。親を対象としたプログラムについて説明を受け、結果として子どもへの関わり方や生活への充実感(社会に貢献しているという)が増していることがわかった。そのプログラムでは、それぞれの子育ての違いや、親としてのバックグラウンドの違いに重点を置き、「こうすることが良い」ではなく、参加者が自ら考え、行動できる

ような参加型のプログラムが行われており、主体的参加の重要性を学べた。

日本においては、体験できないことが多く、あたりまえという考えから視野を広げることができたと思う。「日本ではこうだけどタイではこう」と比較ばかりしてしまい、自身の考えも「日本でもこのような取り組みをするべきだ」と考えていた。しかし、それぞれの国で文化も社会背景も、人々の価値観も異なるため、安易にこうしたらいいと考えることや、よし悪しを決めつけるのではなく、それぞれの国のバックグラウンドや現状などの根本的部分を理解し、取り組みへのエビデンスを理解していくことが重要であると学んだ。そのため、タイでの学びをそのまま落とし込むのではなく、タイではこのような背景があってこのような取り組みをしており、日本ではこうだから、このような取り組みはどうだろうかという新たな視点の考え方として、学んだことを活用していきたいと考える。

1931136 細川 未来

タイと日本では健康指標や医療体制も異なるが、なぜ現在のような体制になったのかということや、その根底にある文化を学ぶことが重要だと感じた。グローバル化が進んでいる中、同じような医療も同一化しているのではないかと考えていたが、似ている部分はあってもタイにはタイの、日本には日本に合ったものが築かれているのだということが分かった。そのため、同じ支援を行うことは難しくても、その国にあった方法にアレンジして医療や公衆衛生・感染症対策などを考えていく必要があるのだと感じた。

主に研修で学んだことは2つある。1つは外国人にとっての負担を理解することの重要性である。日本で生活をしていても、日本語が理解できるため生活で困ることはないが、タイに行ってみて、習慣の違いや言語の違いなどに戸惑うことがあった。しかし、そのような経験をしたからこそ、日本に戻り「これは外国の人にも理解できるのかな？」という視点を持って考えることも増えた。外国人であっても、その国の医療を十分に理解し、自分で選択できるように、

どのような仕組みが必要であるのか考えていくことが重要であると学んだ。2つめは、日本だけが基準ではないということである。日本で当たり前だと思っていることを「本当に当たり前なのか？」と考えることが重要だとわかった。日本以外にはどのような政策が行われているのかということなど、海外の事例を含めた大きな視点を持って看護について考える習慣を作っていきたい。タイにおける医療制度を学ぶことで、より日本の医療について理解が深まったと考える。HIV感染者が多いタイだからこそ現在のような、若者の生活に密着した支援を行うことができていると考える。日本でも同じような体制で支援を行うことが難しくても、教育や普及活動など参考になる点がたくさんあると感じた。反対に介護保険制度など介護の支援については、日本は発展しているのではないかと感じた。このように相手を知ることで、自分の国について考えるきっかけとなり、お互いを認め合うことで、さらに高め合うことができるのだということを学ぶことができた。

1931218 清水 颯

タイの伝統医療はインドや中国の医学薬学のミックス形態として発達し、さまざまな民間療法や伝統医療が世代と共に形を変えながら伝承されてきた。4大要素理論やそれに基づいた体に流れるエネルギーという目には見えない物質のコントロールにて体の調和を図る医療法など日本にはないものばかりで、かつ歴史の中でしっかりと練り上げられた伝統知識であるものだと考えた。伝統医療施設への訪問では、日本の診療所のような一般的な医療施設とは異なるものの、この施設が地域のコミュニティの中で地域住民の心の支えになっているものだと理解できた。また、実際に伝統医療の体験を通して長い歴史の中で継承し培われてきた技術が本当に価値のあるものだと私自身は感じた。タイにおいて医療と宗教(信仰)のつながりを顕著にみることができる。先進技術や最先端の医療の提供が全てではなく、一見効果や期待されているものはっきり見えない医療にも、その背景には人々が紡いできた歴史や思いが隠されていることなど「国」としての特徴を捉えることができた。こうしたスピリチュアルな部分が日々の生活や治療に対してのモチベーションになるなども知った。日本の医療現場では、現在では尋ねることがタブーのようにになっている「信仰」に関する情報には、こういった面で重要な意味あるものではないかと考える。

このように、この研修にて得られたものは視野の拡大である。表面上のことだけで判断してはいけないということには行く前からなんとなく理解していたものの、実際に日本では見られない文化や日本人からすると「あり得ない」と感じてしまうことも、背景を知ればタイの特徴である。こうした学びを活かし相手の文化や風習の表在的な部分にのみ注目するのではなく、その背景をしっかりと知った上で物事を考えられるようになりたい。そうすれば、その地域の人々の健康や健康な生活を多方面から考える事ができる。自分の物差しの適正は、ときどき見直すようにしたい。

このように、この研修にて得られたものは視野の拡大である。表面上のことだけで判断してはいけないということには行く前からなんとなく理解していたものの、実際に日本では見られない文化や日本人からするとあり得ないと感じてしまうことも背景を知ればタイの特徴であり、相手の文化や風習の表在的な部分にのみ注目するだけでなくその背景をしっかりと知った上で物事を考えられるようになりたい。そうすれば、その地域の人々の健康や健康な生活を多方面から考える事ができる。自分の物差しの適正は、ときどき見直すようにしたい。



国際看護論演習の学び - COVID-19について -

PPT

保健医療学部 1931105 植田 愛都

国際看護論演習の学び - COVID-19について -

1931105 植田愛都

1. 講義の内容 (COVID-19について)

- 1) タイの最新の新規感染者数
- 2) COVID-19の検査方法
- 3) タイの現在の隔離期間
- 4) COVID-19の療養状況
- 5) 学内での感染原因となる5つの活動や対策方法
- 6) COVID-19流行後の看護学部の動き、学生から社会人になった時の課題と対策等について

2. タイと日本の比較

1) タイの最新の新規感染者数 (研修中でのデータ比較)

タイでは…

- ・1日平均1万5千人程度 (ATK検査含む)
- ・新規感染者9人程度 (ATK検査のような簡易検査は含まれてない)

日本では…

- ・1日平均3万8千人程度

→日本より感染者が少ないのは、簡易検査の提出の有無や人口の差、正しい感染予防行動の実施などが関連していると考えた。

2) COVID-19の検査方法

タイでは…

- ・病院でのPCR検査やコンビニで誰でも買えるATK検査 (抗原検査) の実施

日本では…

- ・PCR検査等実施可能な病院での検査やネット購入によるCOVID-19抗原検査キット、さらに無症状で感染への不安がある方などが受け取ることができる無料のPCR検査・抗原検査の実施。

→学生でも簡単に手に入れられる検査キットがあるのは日本と変わらないが、無料検査が受けられる部分での違いがあることがわかった。
→日本の感染者数が多いのは、無症状であれば申し込みで誰でも無料で検査が受けられる環境が、関連している可能性もあると考えた。

3) タイの現在の隔離期間 / 4) COVID-19の療養状況

タイでは…

- ・入院療養は6千人程、自宅療養は4千人程、肺炎や人工呼吸器使用は1000人程。
- ・入院基準は、SpO2 94%以下、90キロ以上、妊婦などリスクが高い人が入院を推奨し、軽症または肺のレントゲンが正常であれば自宅療養。
- ・隔離期間は、現在5日間に短縮

日本との違いは…

- ・隔離期間ではそこまで差は見られないが、日本の方が現時点では2日程期間が長い。

→感染者数減少やパンデミックからエンデミックへの移行などの関連
→1人ひとりが定められた感染予防行動や対策を心がけることが大切。

5) 学内での感染原因となる5つの活動や対策方法

感染原因の5つ

- ①マスクなしの会食
- ②マスクをせず部屋で一緒に勉強
- ③同じストロー使用
- ④スープ(食事)の共有
- ⑤食堂で一緒に食事

→1番ハイリスクとなったのが、③④などで昼食時。対面が必ずしも感染源とは限らない。

→感染予防のために、学生寮の自宅隔離システムの開発や全校生徒ATK検査の積極的な体制構築

→ハイリスクの要因として、タイの文化でもある食事の共有などが関連していると考えら、国や地域の文化や風習などを理解し、その地域にあった感染予防対策をすることが大切。

6) COVID-19流行後の学生の課題、大学 (看護学部) の支援

タイでは…

- ・臨地実習の経験がないまま看護師として働く上で、患者とのコミュニケーションがうまく取れないこと、介助の仕方が曖昧でわからない。
- ・遠隔授業による演習の不足 など

→現場で患者とのコミュニケーション減少、技術実施の不安、離職率の増加などがあり、日本でも同じような問題や課題があることが議論された。

Health Care System of Thailand

PPT

保健医療学部 1931119 新屋敷 美奈



タイの地域区分

- タイは77の州と4つの区域に分かれている。
- 77の州、878の地区、7256の郡、75032の村が存在する。
 - ✓それぞれの州は地区に分かれている。
 - ✓地区は郡に分かれている。
 - ✓郡にはたくさんの村がある。
- 例え：チェンマイ州には25の地区、サラビ地区には12の郡がある。

つづき

- 〈総合病院〉 (general hospital)
- 州 (県) または主要な地区にある
 - 200-500床のベッド数がある
 - 二次医療が可能である
 - タイには合計92の総合病院がある
- 〈地区病院〉 (community hospital)
- 各地区にある
 - 通常は一次医療に限定されている
 - より高度・専門的なケアを必要とする患者を総合病院・地域病院に紹介する機能がある。町の小さな病院で入院が必要になった時に郡の病院に転送される仕組みが確立している
 - タイには合計775の地域病院がある

2. 民間部門

- タイの一部の病院は、民間有限会社または公開有限会社のいずれかによる民間部門によって運営されている。
- 私立病院は、MOPH (保健人口省) の Department of Health Service Support の下にある Medical Registration Division によって規制されている。
- 「総合病院」という用語は、私立病院を指す場合、専門外の医療を提供する病院を指す。病床数が30未満の私立病院は「ヘルスセンター」といわれ、どちらも患者の入院を受け付けている。

民間病院(バンコク115、他の州321) : 436カ所
診療所 : 437カ所, 薬局 : 1109カ所, 伝統医学の薬局11020カ所

タイの公的医療保険制度

- タイは国民皆保険制度ではない。
- 『公的医療保険』と『民間医療保険』の2つに分かれている。
 - 公的医療保険は国民の大半が加入しており、職業や雇用形式などに応じて種類が異なるが、誰もがいずれかの保険に加入するという点において日本の医療保険制度と共通している。タイの医療保険は保険者の年齢に応じて自己負担の割合が変わるという原則はないが、各医療制度の予算、担当する機関、受診できる医療機関などが異なる。
 - タイは格差が大きい発展途上国として知られ、富裕層や中間層は高度な医療サービスを受けるため、公的保険と民間保険の両方に加入、又は、民間保険のみに加入し、私立病院を利用していることが多い。

- 診断に応じて、中国の伝統医療も受けることができる



タイの医療制度

1. 公共・政府部門 (公衆衛生省、その他の政府機関)
2. 民間部門
3. 非政府組織

☞ 健康に対する国の総支出は2020年のGDPの4.3%に達する。
* 高等教育、科学、研究、イノベーション省、軍、地方自治体、赤十字が監督する大学など。

1. 公共・政府部門

タイの病院の大半は公衆衛生省 (MOPH) によって運営されており、医学的および健康関連の状態にある患者の予防、治療、リハビリテーションのための医療サービスを提供している

- 〈地域病院〉 (regional hospital)
- 地域病院は州の中心にある
 - 少なくとも500床のベッド数がある
 - これらの病院では三次医療が可能
 - タイには34の地域病院がある

補足

- 町のヘルスプロモーションホスピタルは、MOPHまたは地方行政局のいずれかによって運営されている病院で、当初は「保健ステーション」と呼ばれていた。
- これらの病院はプライマリケア機能のみを備えており、多くの場合、地区内の村にサービスを提供している。
- 入院患者を受け入れておらず、医師は常駐していない。
→ そのため、地区にある病院から医療スタッフを派遣している。
- (大学附属病院)
- タイの大学の医学部と提携。
- これらの病院のほとんどは、高等教育・科学・研究・イノベーション省の管轄下であり、「超三次医療」レベルの医療サービスを提供している。

3. 非政府組織

- 緊急時に患者を輸送する
→ 救急車を呼んで民間病院に行く場合、有料
公立の医療機関が救急車を配備しておらず、緊急時には近くの慈善団体や病院が救急車を派遣する。



コミュニティヘルスケアホスピタル (訪問)

- 訪問施設：サラビ市の病院の支部の1つであり、セラピーに特化した支部である。
- セラピー：身体リハビリテーション、鍼灸等
- セラピー目的での入院患者、外来患者を受け入れている



理学療法士5名、作業療法士2名、薬剤師2名
Village health volunteer 7名 (登録せずに、施設でのリハビリ経験のあるボランティアもいる)
→ ボランティアの方に対して、昼食代として近くの仏教団体から出ている
• この施設は5-6年前にオープンしたが、現在の新しい施設になってから約5-6ヶ月経過している。COVID-19流行中は最大200人収容可能な療養施設であった。

まとめ

- タイの医療制度として3つの部門に分けられている。
- 保険制度も大きく3種類に分けられる。
- 訪問施設では、主にリハビリテーションが実施されており、入院中の家族による24時間付き添いがあり、日本と異なる点であった。
- デモンストラーションルームが設置されているが、実際に自宅を改修することができる人は少ない可能性が考えられる。



タイ研修での学び HIV・エイズ

PPT

保健医療学部 1931114 香田 斐南
保健医療学部 1931131 幡野 歩花




MPLUS FOUNDATION (エムプラス財団)

HIV、AIDS、STD、性的健康、LGBTQの権利の予防を専門とする全国的なバックボーン組織。

(目的)

- ① コミュニティベースのHIV、エイズ、性感染症の臨床施設を含むサービス革新を促進し、改善する
- ② 人権HIV、エイズ、性感染症(STD)、性的健康の予防に関する意識と知識を高める
- ③ ジェンダーの権利、ジェンダー平等を促進する
- ④ HIVを持つ個人、多様な性的指向とジェンダーアイデンティティを持つ個人に対する偏見、内傷、差別を減らすため
- ⑤ 予防サービス管理業務と全体的な幸福関連の問題の効率性を高める
- ⑥ 公共の利益のために運営し、非営利の目的に専念する
 - ① 政府機関、民間部門、提携組織間の協力を発展させる
 - ② 政治的関与を控える



対象

- ・MSM(男性間での性行為者)
- ・TGW(トランスジェンダーの女性)
- ・MSW(男性の性労働者)
- ・FSW(女性の性労働者)
- ・PWID(薬物中毒者)

HIVにおけるアプローチ①

児童・青少年 親・保護者

- ・早期からの性教育
- ↳ それぞれの発達段階に応じた教育方法


子どもにとって親が1番近い存在であるはずが、性教育に関しては、遠い存在になっている。
子どもたちへの関心の持ち方を変えるアプローチ

親たちのエンパワメントを高めるサポート実施
参加型(主体的)プログラムの実施
子どもにとって安全な性行為へと繋げる

HIVにおけるアプローチ②

青少年の性と生殖に関する健康を促進するための能力開発

- ① ユースリーダー・トレーナーの選定
- ② 能力開発カリキュラムの策定
- ③ ジュニアユースリーダーの選定



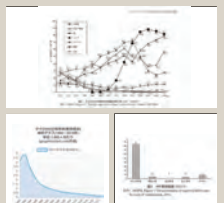
HIVにおけるアプローチ④

青少年の性的リスク行動防止のための統合モデル

青少年の性的リスク行動防止のための統合モデル

- PYDに関する方針と支援体制
地方行政が3年開発計画に政策を押し進める。積極的な青少年リーダーネットワークを構築する。労働者と家庭のデータベースを開発する。青少年・家族に対する評価・支援制度の整備
- 青少年の能力と責任を高める。セクシュアリティ・他者との関係・ライフスキル・性的リスク行動を防止するためのスキル
- 子育てスキルとセックスに関するコミュニケーションの強化
- 学校における性・人間関係教育の強化。他校からカリキュラムを真直し・余分なカリキュラムを強化。ポリシーと年計画を決定する
- 青少年と保護者のためのサービスの提供。臨床標準病院(サービス提供・ウェブサイト)・学校(ピアサービス)・学校(情報提供を強化)
- セックスに対する態度を変え、地域社会における責任あるセックスを促進する
- 青少年の性的リスク行動防止に向けた環境の方向転換。青少年がナイトクラブに入ってアルコールを購入することを禁止する。薬の管理。ダムへのアクセスを制限する。リスクスポットの管理措置の決定

タイのHIV/エイズ歴史

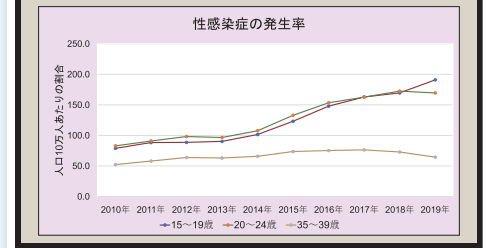


- 1984年 最初のエイズ感染者が確認される。
- 1989年 感染者急激に増加。
- 1999年 死因の第1位となった。
- 2003年 NGOの協力でエイズをはじめとする性感染症が多いことがわかった。
- 感染経路として1番多いのは、性行為
- 2番目に多いのは薬物注射であった。

MPLUS FOUNDATIONの活動

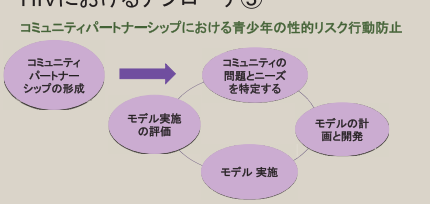
- 2003年 - 健康リスク行動と男性の健康管理に関するデータ収集
- 2011年 - 財団登録(MPLUS FOUNDATION)
- 2015年 - 内部HIV検査サービスを開始。オペレーティングシステムを強化し、さまざまなコミュニティのターゲットグループによりよく到達し、収集されたデータを保存。
- 2017年 - タイ疾病管理局より、ダイヤモンド レベルの標準コミュニティ HIV/STI テスト サービスセンターとして認定された。
- 2018年 - チェンマイの主要集団にサービスを提供するために国家保健安全保障局(NHSO)から資金を確保した。
- 2019年 - National Health Security Officeのサービスユニットとしてリストされる
- 2020年~2021年 - タイにおける活動範囲拡大(ランバン、ベツチャブーン、スコタイ、ウッタラディット、ナコンラチャシマ、ターク)

RRTRTP	内容	工夫
Research (アクセス)	HIV検査を受けられるよう、受けられるようにする。	コロナ前はさまざまなイベントでブースを出し、イベントに来た人が気軽に受けられるように整えたり、ゲイの人たちが好んで使うアプリでの提示版の作成を行い、啓発活動を盛んに行っている。
Recruit (ヘルプサービス)	ターゲットグループをリクを受付けてもらう。	リニクやモバイルユニットサービス(車でのサービス)、遠隔の検査を受けってもらう。
Test (感染性検査)	検査前後に必ずカウンセリングを行い、検査後、検査結果を報告する。	結果が陽性でさらに詳しい検査が必要な時は、病院との連携を図り、対象の保険の住む地域を考慮して、どこで病院で薬をもらうことができるかなどをサポートとアクセスを行う。
Treat (若ウイルス薬による治療)	検査で陽性となった人がその日のうちに一刻も早く薬を処方してもらい治療できるようにサポートする。	タイも日本を比べるとLGBTQへの関心があるタイでは、性に関してオープンであることもあり、検査を受けることに関してはとくに進捗心はない。しかし、検査で陽性になるということはおおらかにできることではなく、いつも行く病院での治療の受け取りをしづらいというところがあるため、違う病院からもらうための手続きをサポートを行う。
Prevention (予防)	陰性に対する行動が中心となっている。	リスクのある行動がある場合、予防薬を飲むこと(プレップ)の使用を推奨するセンターがある)。定期的な検査の実施。
Retain (保持、留まる)	陰性だった人のアポイントをフォローする。	陰性の人のとの継続的な関係作り。少なくとも3ヶ月に1回はフォローアップする。

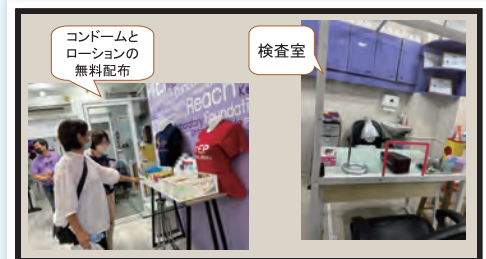


HIVにおけるアプローチ③

コミュニティパートナーシップにおける青少年の性的リスク行動防止



コミュニティパートナーシップの形成 → コミュニティの問題とニーズを特定する → モデルの計画と開発 → モデル実施 → モデル実施の評価 → モデル実施



国際看護演習：母子保健 PPT

保健医療学部 1931136 細川 未来

国際看護演習：母子保健 1931136 細川未来

講義の内容

タイにおける助産師の歴史

【看護学校の変遷】

- ①看護：3年6ヶ月+助産師：6ヶ月
- ②看護と助産師合わせて4年間

現在は看護と助産師のカリキュラムが統合された
(看護師と助産師の資格が分かれていない)
4年間学ぶことで、女子だけでなく男子も助産師になれる。

タイにおける産後ケア

- 〈現状〉
- ・全体の10～30%が産後うつになる。
- ・自宅に帰宅後症状が出現する。

- 〈対策〉
- ・「コミュニティーメンバー」と連携を図る。
- ・第2、第3のヘルスケアシステムと連携
- ・行政と連携

コミュニティーメンバーとは？
・勉強会を得てヘルスボランティアとなった地域住民

〈役割〉
自宅を訪問し、問題がある場合は病院に連絡する。

チェンマイ病院訪問

【新型コロナウイルスによる影響】

- ・入院前にATK(抗原検査)を受けることが必須。陽性の場合は、別のエリアに移動
- ・妊娠や出産について学ぶ機会に限られる場合もあるため、情報を動画で提供している。
- ・流行前は家族が分娩室まで付き添い可能であったが、現在は付き添いでできない。
- スマホを持ち込み、ビデオコールしている。

日本との比較

【実習の違い】

母性実習における男子学生の受け入れ

日本
・保助看法により女子しか助産師になれないと決められている。
・性差による疎外感から不安を抱える
・女子にしかできないことや、男子は参加できないことがある。

タイ
・男子も助産師資格を持つ
・抵抗を感じない。
・患者さんと密室で2人きりにならないようにするが、患者さんも抵抗感が少ない。
・学校でも男女を分けず教育が行われている。

実習から得た学び

- ・母性実習において男子学生はケアに関わることを選択することのできない状況であるということを初めて意識した。そのような状況が当たり前だと感じていたが、当たり前ではないのだということに気づいた
- ・母性実習に置いて男子学生も母親の意見を踏まえた上でケアに参加できるのか選択できるようにすることが重要ではないかと感じた。また、できない部分があることに對する学習の機会も必要なのではないか。

講義の内容

タイにおける助産師の歴史

【西洋医学の導入】

- 60～70年前：助産師が誕生
- ・背景には女王の子どもの死産経験があり、女王が改革を進めた。
- ・妊婦の安全を守るためのスキルを身につけることが目的。

アメリカの医療や看護の導入

- ・病院で出産するようになり、ヘルスケアシステムが全て変化。
- ・出産は病院が基盤

タイにおける助産師

〈制度〉

資格：国家試験8科目を全員が取得する(6つが看護、2つが助産)
→看護師不足の解決のため、1人の看護師が様々なスキルを身につける必要があり、急な出産に対応できるようにする。

〈男女比〉

男性の助産師：多くて5%



チェンマイ病院訪問

【チェンマイ病院の特徴】

- ・基本的に問題を抱えている妊婦を受け入れる。
- ①痛みが強すぎる場合
- ②異常な状態 例) 血圧が高すぎるなど

- ・出産方法を簡単に選択することができ、帝王切開を選択することが多い。
- ・出産後は常に母子同室であり、母子の接触を大切にしている。
- ・800g以下の低出生児はNICUで過ごす、その前に母親の状態がよければ母子同室を行う。

日本との比較

	妊産婦死亡率(2017年)	乳児死亡率(2019年)
日本	5	2
タイ	37	8

「Unicef for every child 子どものためのユニセフ」
子どもの死亡率に関する指標、母親と新生児の健康指標

タイの周産期医療は健康保険でカバーされるが、妊産婦死亡率は10万人当たり37人(日本の約7倍)、乳児死亡率は1,000人出産当たり8人(日本の約4倍)であり、医療環境は未だ厳しい状況にある。

実習から得た学び

- ・妊娠や出産、子育てに関することを地域でサポートする体制を作ることが重要だと感じた。タイのように地域サポートを充実させていくためには、地域コミュニティを活用するための政策が重要。
- ・元々あるコミュニティの力を現在のスタイルに変化させることが大切なのではないか。
- ・看護師に求められる能力はその国の状況や考え方によって異なる。そのため、看護師になるまでの過程も異なる。どちらが良いかというよりも、どちらも認めていくことが大切。



タイ研修 — 伝統医療の学び —

PPT

保健医療学部 1931218 清水 颯



タイ研修
— 伝統医療の学び —
1931218 清水颯

タイ研修で 体験した伝統医療

- ▶ タイマッサージスクール
...Yam khang ,tok-sen
Hak , Plai , Ched
- ▶ タイ古式マッサージ
- ▶ 吸玉療法、鍼灸



タイマッサージスクール②

- ▶ Chek (拭うという意味がある)
...患者が気になる部分に葉を当てて擦る。
(悪いと赤くなる)
使った葉は悪いものをつけた状態になっ
ているため、必ず破ってから捨てる！
- ▶ tok-sen
...tok(打つ) -sen (エネルギーの経路)を意
味する。
筋肉疲労を起こしている部位はこりや痛
みが生じているためそれを木槌で緩和する。



現地住民と伝統医療

- ▶ 伝統医療を行う「村医者」という存在
...まだ医療が発達していなかった田舎では、この村医者とい
う存在が欠かせない！村医者も地域に溶け込む。
- ▶ ランナー文化で発達した医療の起源は定かではない
...師匠から弟子へ、父から子へと伝承され続けて今日まで
残っている。だからこそ、先祖への感謝を忘れない。

タイ古式マッサージ

- ▶ タイ原産のマッサージの一種
...タイでは「ヌアット (圧力) ・ベン
ボラン (古代) 」として知られる。
肺から空気が取り込まれ、センに
沿ってエネルギーが浸透するという
理論をもとにエネルギーの流れが悪い
部分を改善して4大要素の安定化を
図る。



タイの伝統 医療とは

- ▶ 長い時の中で多様に形を変え
ながら今日まで継承されてき
た人々の知識
- ▶ 医学的根拠の有無にかかわら
ず、タイで発展してきた思想
や宗教などの信念、住民の経
験に基づく知識から脈々と形
作られてきたもの。

タイマッサージスクール①

- ▶ Plai (ホンツク生姜)
...食用とは異なる治療の基本として扱われる
薬用生姜
- ▶ Hak
...木のナイフ (雷が落ちた木ならなお良い)
or動物の牙、Hakですりおろして水に溶いた
Plaiを悪い部分に塗る
- ▶ NA MO PUT THA YA NA MA PA THA
...おまじないの一種。
NA MO PUT THA YA(先代への感謝) と
NA MA PA THA (4大要素) の意味がある



タイマッサージスクール③

- ▶ Yam khang(ヤムカーン)
...熱した火鉢に鉄板を乗せて、その上にオイルを
塗った足を軽く踏んで熱し、クライアントの背中
などに塗る。
また、火を用いることで邪気をはらい悪霊や悪精
を寄せ付けないことも重要とされる。



タイ医学の基礎知識

- ▶ 4大要素とセン
...体を作る固形の要素 (土)、体を流れる液体全般 (水)
体を流れるエネルギー (風)、熱エネルギー (火)
エネルギーの経路 (セン)
- ▶ タイの病気の原因に対する考え方
...4つのエネルギーが安定して健康となる。
= 体調が悪いとエネルギーのバランスが悪い！
→ エネルギーのバランスを整える (タイ古式マッサージ)

まとめ

- ▶ タイは多くの自然の中で多様に発展してきた
医療がある。
- ▶ 時代と共に村も発展してきているが、今もこ
うした伝統医療は住民に溶け込み、愛されて
いる。
- ▶ 先進医療だけでなく、こうした伝統医療にも
関心を持つことには意味がある。

軌道に戻る！ 奈良から世界へ。

2022年は、パンデミックの長い期間を経て、多くの人にとって、日常生活の変化と正常化の年となります。奈良学園大学では学生が再び顔を合わせて集まり、当センターでは年間の活動の多くがオンラインと対面で実施することが可能となった。

両方のキャンパスを1つの同じキャンパスに統合したことで、多くの新しい課題と新しい可能性がもたらされました。しかし、これは私たちの社会・国際連携センターのすべてのメンバー間の関係を強化するのにも役立ちました。

私たちは世界におけるアジアの重要性を信じています。2022年、当センターは中国、タイ、カンボジアの大学を含む国際活動を行いました。相互の文化理解を通じて、学生たちはプレゼンテーション、ボランティア活動、文化交流などの活動を経験しました。これらの学習体験は、学生の刺激になるだけでなく、すべての大学パートナーのグローバルな教育環境をサポートします。

私たちの新たな挑戦は、この新しい時代に学び続けることです。オンラインでのやり取りと迅速な繋がり、世界中のすべてのパートナーとの関係を強化するのに役立つ新世代。

私たちはSDGsを信じており、これらの目標が世界により多くの平和と平等をもたらすことができると信じています。社会・国際連携センターにとって「地球規模で考え、足元から行動しよう」が大事なモットーであり、将来的には、このモットーが私たちの活動の多くを表し続けます。

ここ奈良の登美ヶ丘で、私たちはネットワークを広げ、教育を新しいレベルに引き上げ続けたい。

奈良から、中国、タイ、カンボジアのすべての友人とパートナーに敬意を表します。

社会・国際連携センター
編集後記

オチャンテ・カルロス

Back on track! From Nara to the world.

The year 2022 represents for many, a year of change and normalization of daily activities after a long pandemic period. At Naragakuen university, students gathered face-to-face again, and in our center, many of our yearly activities were held online and face-to-face.

The unification of both of our campuses into one same campus brought lots of new challenges and new possibilities. But this also helped to strengthen the relationship between all the members of our Social-International center.

We believe in the importance of Asia in the world. In 2022, our center held international activities including China, Thailand, and Cambodia universities. Through mutual cultural understanding, our students experienced activities like presentations, volunteer activities, cultural exchanges, and so on. These multicultural experiences not only serve as stimulation for our students but also supports the global education environment for all of our partners.

The new challenge for us will be to keep learning in this new era. A new generation where online interactions and fast connections will help strengthen relationships with all our partners worldwide.

We believe in SDGs, and that these goals can bring more peace and equality to the world. Here in our Social-International center, our motto has been always: "Think globally act locally" so, in the future, this motto will represent many of our activities to come.

Here in Tomigaoka - Nara, we will try to expand our network and bring education to a new level.

¡Desde Nara, con mucho respeto para todos nuestros amigos y colegas en China, Thailandia y Camboya!
(From Nara, with much respect to all of our friends and partners in China, Thailand, and Cambodia)

Social and International Cooperation Center
Editor

Carlos Ochante

社会・国際連携センター発刊

〒631-8524 奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1

Tel. 0742-93-5405

<http://www.naragakuen-u.jp>

